

# 大衆

NO. 15

I※ 大衆BU/IDの内的止揚  
と過渡期世界の党主体形成に  
向けて

II※ 「戦旗」派内分派斗争  
への視点

東京南部地区反帝戦線機関誌

連絡先(583)-7274

定価 100円

I (カ2次Bundの内訌止揚と過渡期世界の  
党主体形成に向けて)

(はじめに)

カ2次Bundの痛苦な主体的反省過程を媒介として、根底的に自己切解を通して新たな飛躍の主体的契機系口をつかみとり、継承、発展止揚を内面的に獲得することがとわれているのである。このことをさけて通ることは出来ない。まさに生みの苦しみを普遍性を持って自己対象化する試行をさけ客観主義的に清算することは出来ないのである。これらの方向性こそ、我々の再出発の地平であるのだ。従って「理戦9号」の日向論文におけるカ2次Bundの総括の視点は素直に云って、客観主義的清算、右翼的自己否定になっている傾向が大きく横たわって様に想います。そしてその政治的結論は、一切一向イコール赤軍派に求めさらに西Bundに求めると云う形でシェーマ化されている。そして「7.6」でカ2次Bundが破産した。昨年の11月斗争は一揆主義的ウランキストである。RG等は、現在創出すれば密教集団になる。また昨秋斗争における战斗行動からの召環を、命をあげる党がなかった、政治指導部の無能力にあったと云うことを持って、自己の日和見主義を合理化、正当化を行なっている。何故に早大全学委派の右翼的潮流(叛旗以下)を生み出したのか、このグループは、最も日向理論の信仰者でエピゴーネンであったのである。一同志による自己告白的な「〇〇派」の政治組織総括の中にも明らかにされているごとく、11月決戦以降、いわゆる「左派右派論」は意味をなさなくなり、〇〇同志の出獄まじりの組織日 and 見主義におちいったことは、革命的フラクたうんとするものの自己失格であったと書かれているが、その様な部分を政治的、組織的に切り捨てることにおいて、すべて解決できないのである。最低この総括をぬきにしてすべて西Bundに責任を転嫁することは、あまりにも御都合主義ではないであろうか。このことをいくら粉飾しても「史的事実をねつ造することは出来ないであろう。我々

は一切自己原因、自己結果的総括を行うことを否定する。必ずや反動的清算主義におちいるのである。また、あまりにも赤軍派を意識するあまり、いつのまにか赤軍派のコンプレックスのかたまりにならざるをえないのである。たしかに赤軍派はカ2次Bundの悪しき傾向を最も純化したのであるが、問題なのは、赤軍派をどの地平において根底的に止揚するのかか決定的にとわかれていたのである。まさに権力との斗争において、その革命的実践の基準においてであるのだ。そうでなければ結局は革命的行為を論理においてすべて否定する革マル主義的対置においてしか赤軍派を否定出来なくなるのである。

従って我々は「理戦9号」に展開されているカ2次Bundの総括の基準そのものと根底的に対立せざるをえない。何故ならばカ2次Bundを清算主義的に総括し、通称云われているところのカ3次Bundの飛躍は、まったく外在的地点から置き換えられてしまう危険を持っているからである。そのことは、カ1次Bundを過大評価、必要以上に美化することによって、カ2次Bund自身を、我々が主体的反省過程を通して獲得しつつある到達した地平を迷に反動的に帰結させるもの以外にないのである。まして連合Bundであったからためであったと云うことを云ってみても、何の止揚の内容的方向性は見出しえないのである。すべて始元論的に総括を行うことによっては、それは何度も云っている様にすべて清算主義的にしか終わらないのである。清算ではなく、内面的止揚がとわれているのでありあれこれの欠点、弱点を心情的に暴露することによっては、何も再生されないであり、それは結果として〇君の様に農民的不満分子としてしか投影されないのである。また同時にその事とは他フラクションへの自己転換を行うこともまったく問題外であるのだ。そして自己の部分性を忘却し、すでに全体性を獲得しているかの様にナルシズム的錯乱におちいり、自己と同一性の認識上の違いが、すぐ存在上の蔽としてみ

なし、革マル的党派解体の組織戦術の持ちこみが党の革命であると言うイデオロギー滅却運動こそ、根底的に止揚されなければならないのである。そして所詮、革マル主義に鉄鉤を打とうとしても無理な話であるのだ。エピソード的につけくわえるならばS大の革マル派は「理戦9号」は一口主義ではないか、日向派は革マルミン14であると言っていることを、我々深刻に受けとめなければならない。我々は絶対に、第2次Bundの内的上揚を、形式-実体-内容において実現して行くことであり、革マル主義的改変を絶対に許すことは出来ないのである。以上我々の政治的立場の基に第2次Bundの総括の視点を提起し、過渡期世界の党的主体の内的論性を明らかにしたいと想います。赤テキの諸君は、第2次Bundの総括の基軸を、①自然成長的党形成論であり党主体が欠如していた。②危機論戦略主義であった。③革命観=共産主義論がなかった。と云う以上の3点において総括の基準を指定されているが、これに一対一対応として展開するのではなく、第2次Bundの総過程を現代的に対象化し、同時に我々自身の主体的総括を媒介として明らかにしたいと想います。

① 自然成長的階級形成党派から、脱脚主体的転換は、いかなる総括に立脚して獲得されるのか。

A) 第2次Bundの総体の発生史的根拠は第1次Bundの三分解=崩壊の基底を受け、他者的には、革共同の党が国家にとって変る倒錯した反スタ共紅形成主義に対置し、Bundイズムの復権-再生を目標として開始された。これが共通の基盤として、存在していたのである。すなわち政治過程論に象徴される「大衆の自然発生性に依存し、大衆の内なる国家の幻想性を、国家権力との対決を、過程的戦術を媒介として、徹底した民主々義=二重権力へ到達せしめ大衆は国家をこえる」従って、党は戦術を行使する主体=手段としての位置を占める。階級斗争論であった。そしてその内に反スタ=反共紅主義的要因を含めて形成され

て来たのである。「現実のマルク的人間の自覚の論理の反スタ党形成論、永遠の今の中心的拡大に対する」現実の革命的実践を基礎において党を形成していこうとする同盟の階級形成論の「史的、相対的優位性としてあった。しかしそこから党形成の論理的主体は明らかにされないと云う致命的弱点をその内的論理性に於いて存在していたのである。この点における主体的解明こそ、最もとわれていたのである。「過程の意識としての党」疑似赤論は、ルカーチの組織論に依存していた側面を内容として持っていた。これが統一Bund時代位置であった。すなわち「共産主義復刊準備号」の「論争のよびかけ」に最も象徴されていたのである。又飛鳥浩治氏の「革命的政治斗争」とは何か、反帝社会主義の組織論メモに明らかにされていたごとく「党は過程の意識であり、不断に党たることを証明するものでなくてはならない」として定式化された。すなわち「ルカーチの組織論のP77」に最も象徴されている。「プロレタリアートは、ただ階級社会の絶滅によってのみ、自己を解放することができる。そこでプロレタリアートはあらゆる抑圧された搾取されている社会層のためにも自己の解放斗争を行わざるをえない。あらゆる抑圧され搾取されている社会層が個々の斗争においてプロレタリアートの味方になるか、それとも敵の陣営に走るかということは、不明瞭な階級意識を持った。これらの社会層の立場からすれば、多かれ少なかれ「偶然」である。それはプロレタリアートの革命的政党の正しい戦術によるところに、極めて大である。この様にこのばあいは 行動する諸階級の社会的存在が いろいろ違っているし、またこれらの諸階級の結合は わずかにプロレタリアートの世界史的使命によってのみ媒介されるのである。」と提起されている。このことは、革命過程をプロレタリアートの階級意識の発展過程と同次元に問題をたて、具体的状況の変化に 常に大衆は一步遅れた存在としての意識構造を持っているものとして、そのギャップを、

革命党が革命へに接近される方法として、その環は、戦術によってまさに大きく規定される。まさしく大衆意欲は革命斗争の経過中で変化する。すなわち党が形成される過程の意欲としてある自然成長的党形成に根本的困難があったのである。

それは情勢が、階級形成すると云う自然成長論にある。そして党は「大衆意欲より常に一歩先を示すこと」云ったルカーチ流の組論論は不断に大衆の自然発生性にハイキレ、埋没する傾向を拡大させるのである。この根柢には正しい情勢分析、政治方針を提起すればならずや大衆は決起する。そして小戦一大戦術の展開としてある。すなわち大衆斗争のダイナミズム、ラディカルな斗争戦術を媒介として、大衆を権力との対決に肉迫させ極限まで対権力斗争に接近することを通して、大衆の意欲の分解をはかることによつて、階級意欲は形成される。この階級形成の方法論に立脚しその党性的根柢としていたのである。そして革共系の認論運動、党への囲いこみ一本づりのサクル的学習会運動に対置し、せまい党派主義、聖濟主義からの解放として階級斗争論—運動論として相察されたのである。従つて日向氏の云うごとく、単に「60年安保斗争」の結果解釈をはかつたものとして提起されたとしてのみ総括を行うことは、まったくの史的過程を対象化することを放棄することである。しかしこの「政治過程論」は60年BUNDの理論向點と党建設に対する主体的アプローチは欠序したまま提起されていたことはかきしやうのない事実であるが、しかし革共同イイズムによつて解体—集約を行うことが出来なかつた点こそ、敵権力との究端攻防戦に立脚させるといふBUNDイイズムの战斗性伝統の堅持としてあつたのである。従つて日向氏の云うごとく、戦術の悪無限的拡大、独自の戦術左翼集団だつたのであると切り捨てることによつては、何も再生されないのである。

(B) オ三期論は、反帝社会主義論を基調にM.S.的的には、「戦後の平和と民主主義の時代の終えんし、次は反帝斗争の時代であると提起され、その政治的実践の結果、反帝純化主義を生み出したが、しかしその運動の復的

転換の意味を明らかにした点において画期的であつた。すなわち全学連11.12回大会(8中委九回大会路線)は旧日際派理論による転換路線、トロツキズムの導入、旧共主義者同結成によつて世界革命論、「一段階战略—右傾化阻止記(同盟軍規定、先駆性記)であつた。高度聖濟成長下の中にあつて総評民同の日本的組信主義の聖濟斗争は、合理化と賃金ギブアンドテイクとして定立し、その弱さを補完する街頭政治斗争の中で、すなわち市民的政治斗争の最左派(小ブル意進主義=ジャコバン主義)のヘゲモニーの連続的にプロレタリアートのヘゲモニーに移行を、既成指大部と訣別した新左翼の和造において、安保斗争において全学連の战斗力の動力であつた。この学生運動の街頭行動の徹底化を持つて、民同内部の戦術左派、左翼パネとしての、東京地評戦術左派グループ及び日教組の平垣派等の、党内戦線内部に、革命的左翼形成の契機を即時的にはつくりだしたのである。旧BUND総体としての永久革命論は、63年の全学連再建の失敗が示すように終息した。いわゆるオ三期の転換が明確になつたと称して、「現在、国内体制の再編が終り、いまや市場分割戦だ」という把握は一面的である。たしかに安保、三池斗争を頂点として、ブルジョアジーは、国内体制の安定をはかつた。しかし、このような帝国主義の内的膨張の終了での国内体制の再編=帝国主義的統治形態の確立が目指した段階であり、日本資本主義の和造的予備に着手しなければならない。そして「60年安保以降の諸階級の動向」は、政治的アパシーを生みだし、「既成左翼」の総評民同の組論的弱体化と資本への協調=全向化が進展し、政治的には社会党の訂憲完全実施の空洞化と民社—同盟会議の一体化」を伴いつつ、結局「永続革命型の運動母体である全学連—総評—原水禁といった市民的ブロック」そのものを解体、すなわち階級の運動基盤は消失している。従つて市民的政治斗争と日本の組信主義斗争を、こゝる運動論内容を、日本資本主義の統治支配形態、産業—階級和造の転換との関連において、明らかにしたのである。すなわち運動主体の



形成、アロレタリアートの階級的ヘゲモニーの形成の問題として提起されたのである。このオ三期論との関連において論じるならば、大きく、ローザ・ツラムシに依在して問題を打ちだされていたのである。すなわち政治闘争と経済闘争の結合、機動戦と陣地戦等はまさしくその内容としてあったのである。

ローザの大家ストライキ、党及び労働組合に展開されている内容と類似しているモメントを持って主張されていた。すなわちローザは、「経済的改良のための部分的闘争と、革命のための政治闘争の間に、万里の長城を見出す、すべでの改良主義と反対に、ローザは革命的時代には、経済闘争は、政治闘争へと成長すること、そして、その逆も同じであることを明らかにした。運動は、経済闘争から政治闘争という一方的通行ではなく、反対方向へ向うあらゆる主要な政治的大衆行動は、その頂上に達すると、一連の経済的大衆ストライキを生む、そして革命全体について適用する。政治闘争の展開にともなうその純化、強化は、経済闘争を遠のかせないだけでなく、逆に後者よりも発展させると同時により約法化し、より強化されるのだ。この二つの闘争の間には、相互にイキョウを与える。その闘争のため、労働者は、その状態を改善すべく視野を押し広げ、それを見失わずに遂にやうとする衝動を強められるから、彼らの闘争精神はまさに高まる。すべての政治行動の高波の後には、肥沃な堆積物を残されており、そこから数多くの経済闘争の芽が芽生える。その逆もまた同じことなのだ。資本に対する、労働者の不断の経済闘争は、政治的戦闘の各期中、彼らを支える経済闘争は、いわばそこから政治闘争が、つねに新しい力を吸引する。労働者階級の力の恒久的に貯水池を形づくるのだ。倦むことを知らぬアロレタリアートの経済闘争はあらゆるとき、いたるところで鋭い、孤立した闘争にみちみち、そこから予想されなかった巨大な規模の政治闘争が爆発する一言で云えば経済闘争は、運動を一つの政治的集結から他の集結へと前進される要因となる。又政治闘争は、経済闘争のための土壌を周期的にするものだ。あらゆる瞬間に原因と結果は交替し合う。この様にして我々は、経済的、政治的の二つの要素がロシアにおける大衆ストライキの時代を通じて

互いに離れ、離れにたつてはしななつたこと、もちろん、マヤンキツクな図式なほのめなす様に、互に否定しあつたりしななつたことを見出すのだ。」以上がローザ主張である。時に64年の「四・一七型」のセネストの経済要求を出発とした闘争の波が形成されるとするならば、正に政治闘争と経済闘争がからみ合う段階での闘争が、運動主体、闘争主体の準備として任務を措定するとされ、4・17セネストと新左翼の任務は、4・17セネストは、経済闘争と政治闘争が、刺着する情勢が、成熟しつつあるを示した。公労協を中心としたストが民衆反し、権力との全面的対決し弾圧、政治ストという方向性が成熟しつつあるを示した。まさしく、帝国主義的権力構造（改憲の实体）に対する直接の敵対を意味する。更にブルジョワジーが対外政策に基調をおいた場合には、経済的矛盾を排外主義にすりかえる攻囲に対する反抗が、合理化賃金カット反対闘争の中から形成され、逆に、我々はそのエネルギーを日韓、憲法闘争という視点から、組織する時代の到達を予見させると展開されているとされ、4・17セネストは、他面労働運動のヘゲモニーが宝樹構改、全労、そして代々木日共（階級的民主的労働組合）、更に新左翼系第三潮流へと分化を示した。このことは市民的政治闘争、日本的組合主義の崩壊による、市民的統一戦線の崩壊と、新しい統一戦線を不可避に要求されている。労研、社研運動の止揚—労働者政治組織の全国形成として新しい階級闘争の局面に対応する組織形態として提出されたのである。そして「労働者政治組織」を潜在的アロレタリアート自己権力を今日的に表現し、機能するものとして位置付けられていたのである。そしてオ三期階級闘争の到来の時代として規定したのである。またこのオ三期論の中に「政治闘争、社会的政治闘争」と「オ三期学生運動論」があり、その中で、先と同様に「経済闘争と政治闘争がからみあうような段階での闘争」と強調した。資本の政治攻囲、経済的攻囲が一体して対応するが故に明確に資本の存在を意識させていくのである。

すなわち「過剰生産と国際収支の悪循環」「侵略(アジア進出)」と「抑圧(所得政策、賃金政策の転換による物価値上げ、労働強化に向かわざるをえなく)」なっている情勢に規定され、政治斗争と経済斗争が結合して発展する時代に突入したとされていたのである。そして「現代革命の改良と革命の統一した指導の確立の内容として、一方における改良のつみ重ねのみでは革命は決していらぬし他方改良斗争を通して工場に於ける権利、拡大を抜きにしては、単なる、官僚集団となる。又権力に粉碎されるのかいずれである。また学生層に於いては、自己の現在、未来に渡って資本主義社会そのものを評価が、不断に直接的に向い続けられる」「そして今後社会的政治斗争による大衆市民社会-共同体への長期的に政治-経済、文化へゲモニーの確立した資本=国家の直接的支配と収獲に対しての斗いを通じて獲得することを同時に並行して、非合法的な日韓阻止、ベトナム戦争反対の政治斗争を展開しなければならぬ」と提起されていた。すなわち大衆的政治へゲモニーの形成は、「社会的政治斗争、政治斗争」のどちらも抜きにしては語り得ず、平和と民主主義に立脚した大衆の戦後憲法価値感を持って、大衆を階級的行動へと発展させることとの運動基盤が喪失している事態の中で、反帝斗争に結合しなければならぬ。まさにここに展開されている内容は、この時期階級斗争の史的局面として基底されているが、ローザの改良と革命でのべられている。二つの斗いの相互関係の現状分析をふまえて提起されている内的論理において同一性を持っているのである。そのことは逆に経済斗争に政治性を付する傾向を持って展開されていたのである。またオ三潮流論=統一戦線論は、ローザの遅すぎた分離の問題をも含めた、革命の水先案内としての党というローザ主義の限界性を主体的に把握することが欠如していたのである。既ちローザ、ルグセンアルグは腐敗し、战斗性を失ったドイツ社会民主党、労働組合の腐敗に怒りを爆発させて、「マッセンストライキ論」を提起した。ローザのドイツ社民批判はその魂において正しかった。1905年のソビエトの基礎が既成労働組合の

上からのタテ割りゼネストではなく、まさしくレーニンград、モスクワ地区の地域マッセンストライキであったことを戦術論的に着破したことも正しかったのであるが、ロシアとドイツの権力構造の差異とプロレタリアートの自然発生性の差異を把握できず、同時にそのことは激烈な革命的大衆斗争の時代に見られる、真の斗争のことであり、斗争が生みだすものは、あくまでも組織であり、組織の力を一定の段階に達するまでの組織であり組織の力が一定の段階に達するまでは、斗争を認めるわけにはいかないということを経験しつつも、しかし生きた弁証法的発展では、逆に斗争が組織を創り出すのであると語り、大衆斗争が組織の基礎であるということを経験するあまりにもプロレタリアートの階級斗争の力の根源は、中核にあたる組織労働者ではなく、広汎な周辺部の革命的プロレタリアート層であるということまで飛躍してしまったのである。従って19年1月、スバルタクス、ウィークの大衆蜂起の誤りを感じながらリーアグネヒトと共に(社会民主党右派指導部とカイセルの軍隊)ノスケに、何千人も労働者の殺りくのあとに同じく殺害されたのである。大衆運動こそ母なる大地であるというローザの限りないプロレタリアート大衆への信頼、その革命的なトスと魂は評価しうるけれど、彼女の党に対する思考は、何よりも、彼女の「ロシア革命論」を一読すれば充分である。ローザは党形成-組織論においては、一貫してレーニンと対立していた。職業革命家集団を軸とした革命党と労働者階級の労働者党と云う根底的違いを持っていたのである。

C) 統一Bundとマル戦派の再建統一の六回大会の位置

三派全学連の結成、その主潮流のへゲモニーの獲得と云う直接的政治利害の基に再建統一が押しすすめられていったのである。そして再建統一の政治報告は、形式的に戦略、戦術の概念が定式化された。大きく云って政治過程論、三期論+岩田理論の組み合わせとしてあり、既ち岩田体系の枠に反帝斗争論がスポイルした内容として確定され、「民主主義の徹底化」の中に反帝斗争を位置づけられてい

たものであった。「そして、フランス、パリ  
コミューン、ジャコバン党、マルクス、エン  
ゲルス、更にレーニン、トロツキーに次いで  
四たび、アロレタリア永続革命の旗印し、ア  
ロレタリアジャコバン主義の鮮明の旗印を」と  
云い。この永続革命のスローガンとして、  
上述の「反帝斗争をアロレタリア日本革命へ  
日本革命をアジア革命の勝利と世界革命の  
突破口とせよ」というものであった。その内  
容は、大きくトロツキーの永続革命に依存し  
ていた。「結果と展望」の中でも明らかにさ  
れているごとく、権力斗争の見通し、斗争の  
波頭の先端の党としてあり、岩田危機論綱領  
は、今日的マルクス主義の課題の中に明らか  
にされているごとく、最大限綱領(社会主義  
の一般原理)と最小限綱領(改良要求)の  
分離の「エルフルト綱領」はオニインターの  
敗北を意味したと総括し、それを危機論にお  
いて統一するものとしてうちだされていた。  
また多元的國家論(ラスキー的國家論)、ロ  
シアの二月、ドイツのワイマール体制、日本  
の戦后体制をアナロジー化した妥協体制論(政  
党、階級配置論)、逆手論、左翼反対派統一  
戦線を形成すれば労働組合はソビエトへ転化  
発展する。党はその過程で左翼反対派として  
形成しうると去う日本革命の戦術を導いたの  
であった。この六回大会の基調は、岩田世界  
資本主義論に裏付けられていたのである。最  
も象徴的には戦旗紙上の杉村論文に示され  
ていたごとく、現代世界資本主義は政治一軍  
事過程に至済過程に従属、ないしは再編成さ  
れている。従ってドル体制下の諸列強の対立抗  
争は輸血ダンピング戦となるため、日帝は海  
外進出(東南アジア)の衝動はあるが、国際  
競争戦の激化の前にふんつまり、権力の主要  
攻撃方向は国内抑圧をかりたてる。従って  
独占資本と総評の至済斗争を軸とする妥協体  
制は崩れ、至済斗争は激化し、「生活と権利の  
防衛」は反帝斗争へ転化する、その結果、自  
民党と社会党の設会政治代表部の妥協体制は  
崩れ、従って國家は中間政府に至過し、社民  
総評は、上から斗争指令を発し、革命的左翼  
なこれを逆手に取って突き上げ、社民内左翼  
統一戦線を形成すれば労働組合はソビエトへ  
発展する。すなわち反帝斗争の徹底化と(ア

ロレタリア日本革命をアジア革命の突破口と  
して、アジア革命を世界革命へ転化すると云  
う連続革命論(トロツキー)の過渡的戦術で  
あると定式化されていたのである。この様な  
六回大会路線は、階級斗争の実践的展開にお  
いて極端になっていたのであり、旧マル戦派  
との党派斗争は、組合主義、至済主義との斗  
いとしてあり、特にベトナム民族解放斗争は  
単なるアクシデントとしてしかとらえず、す  
なわち日帝への国内的はぬかえりとししか把握  
出来ず、生活と権利の実力防衛は反帝斗争に  
発展すると云うことが強調されていたのであ  
る。彼らは67年の10・8, 11・12の2つの羽田  
の斗いを、総括を、大衆の直接的行動化、既  
成指導部の斗争放棄、無力化としてしか総括  
できず、内部的分解が進んでいたのである。  
我々は階級斗争、革命運動の源泉である国際  
性と暴力性を主体的獲得、その現実の階級斗  
争主体的推進において優越させるものとして  
、その階級斗争主体の基調を国際主義と糾結  
された暴力として対峙したのである。60年  
安保斗争の崩壊以降として65年日韓斗争にお  
いても、権力の厚い壁を破ることができず、  
その闘争行動様式も、以前として60年安保型  
であった。決定的弱さを、反战斗争の大衆的  
高揚は背景として、実現し、権力の幼揺を現  
出させたのである。60年安保に於ける、オ一  
次BUNDの口宏突入、装甲車の夕越え、三  
池斗争のポツパー前バリケード戦、右翼テロ  
、共産隊との斗いは、旧日本帝国軍隊の糾結  
形態を生かし、自衛武装の斗いの内奥に対  
して、はるかにこえた債の斗いを実現させたの  
である。旧マル戦との党派斗争は、明大学ヒ  
斗争の二重の敗北、同盟内部から斎藤、大内  
一派の階級の裏切りを生み出し、その結果、  
全学連の王朝派の位置を、中核派にゆずりわ  
たす結果をなし、遂に同盟内マル戦の伸長を  
許していったのである。統一BUND系の内  
なる自己否定を遂げて、自然成長的階級形成  
党派の止揚を、直感的、至済的に問題をやア  
ローチしていったのである。この時点に於い  
ての木沢の「昼、夜」論の階級形成の内容は、  
同盟内二週間ほどしか問題にならず、引こ  
めてしまうヒロエロであったのである。その  
全面的批判の内容は藤本進治の「革命の哲學」

内容に依拠していたのである。その内容は「労働者階級の主観的生産力としての社会的糾結性（産業的階級としての本質）と現実プロレタリアートの歴史的存在は、資本制経済社会の階級としての私的的商品所有者としての内面的矛盾を展露し、外在化させ、その媒介として起る闘争形態（運動、糾結形態）を提起することを媒介とし階級形成される。」即ち「指導されることの出来る存在」となったことを意味している。農民からのプロレタリアートの転化は、機械制大工場の出現とともに、農民の愚原理性から、主体的原理を拵った存在として、存在と并能と対立を止揚し、プロレタリアートを私的的商品所有者として完成させた。その事とは対立した二重の存在形態＝斗争形態の統一として、自己否定的な、従って不断に発展を強制されるという意味で、歴史においてはじめて出現した特異な存在である。従って労働の社会的糾結性は生きるための手段にすぎない。なによりも生活者である。プロレタリアートの存在と并能との対立が外部から止揚され、それ自身の本質が、外部から与えられたものとして、即ち、自分の存在と本質が、外からのものとして自分に対して、自分を強制する形でしか展開できなくなることは生まれた必然的結果である。以上のプロレタリアートの存在の主体的措置に立脚し、主体の進展—先進的労働者集団の矛盾すなわち党—先進的集団—大衆という糾結的領域における問題を、全国政治新聞を媒介とすることによって、私業革新家集団は、一つの主体としてプロレタリアートに対峙することができる。しかしこれは明らかに転化である。私業革新家集団は、この意味において、現実的な主体の手段となることはできない。勿論、論理的には、プロレタリアートの階級的の本質は、手段としての指導集団のなかへ外化してるとはいえないことはない。しかし外化はあくまで論理的であって、その中で主体たるプロレタリアートの本性が分化し発展して行くことが出来ない。プロレタリアートの爆発的進出に次の一步を示すことは基本的には、その階級的本性の展開、分化を助けることである能力を拵たなければならぬだけでなく、自然成長的に分化してくる。その階級的

本質が自分の中に外在させる路を知らねばならない。すなわち転換しているといえ、プロレタリアートが何かの意味で、指導的集団—階級としての党をきわめて初歩的であつた自分の手段とすることが出来るような指導が行われなければならない。手段は使用するには自覚性が必要ではないのである。その自然成長的糾結に必然的に生起する主体的矛盾を止揚し、融合する二重の糾結性を分化させ、交互作用させることが出来る時はじめて主体としての道を歩むことが出来るのである。そのことを可能にらしめるには、全国的政治新聞や、党の公開性を媒介として、私業革新家の集団が、自分の自然成長性を止揚したとき、それは、これまでいくとものべた様に、また抽象的、論理的な存在であった。こうして私業革新家集団は、自分の内部にもつ在野は、説理主体にすぎなかった。しかし党の公開性を媒介として、その周辺の先進的労働者の糾結、あるいは、糾結的人格を拵つ時、それは、もはや論理的な実体ではない。それは、対象としてのプロレタリア大衆との交互に作用しあう手段を拵っている。この手段、すなわち先進的労働者集団は、主体としての私業革新家の理性をうちに保蔵している。彼等先進的労働者は私業革新家の様な論理的な存在ではなくして、それ自身の実質、その本性を拵り、プロレタリア大衆との間に、さまざまの交互作用をいとむことができる。この意味で先進的集団は「手段となる条件」をそなえている。手段たる先進的労働者集団と大衆との交互作用は、まだ生活者的な現実主義にはねかえされ、それと関係することができない。問題の中心は媒介者としての先進的労働者の集団である。この手段は、論理的主体と現実主義的大衆とを媒介するものとして、それ自身、論理的であるとともに、現実主義的である、ひとも媒介者である先進的労働者集団は純粋な階級的なものであることはできない。それが矛盾したものであればこそ、それは媒介者である。むしろそのことが発展の条件となっている。そしてその結果、この媒介者の内的矛盾は展開できるものであり、問題が解決できるのである。

内的矛盾を展開させることは、これを外化させることである。自分の外的他者と関係することによって、内的矛盾が外的対立となって外化したとき、それは展開できるものとなるのである。先進的労働者集団と他者と媒介させるのは、職業的革師家の集団である。先進的労働者集団が、取革集団に媒介されて、結局し、作用を作り出すことなしには、主体として外的対象と関係することはできない。媒介者としての取革集団の任ムは、先進的労働者集団として自分自身と対立させ、その対立を媒介することである。先進的労働者自身の階級的主体を、それとして発展させることが、媒介者としての党—取革集団の任ムと存するのである。その任ムの成功的な実行によって、党そのものの質も変化するものである。そして至者斗争と政治斗争との間に見られる対立、矛盾は、先進的労働者集団が持つ内的矛盾—私的商品の所有的存在形態と階級的的存在形態との融合した二重性を拡大し展開するものと考えられるからである。以上藤本進治の「革師の哲学」の中の要約した一部の引用であるが、党—先進的集団—大衆という階級的関係をプロレタリアートの存在論に立脚し、認識論を実践論として打ち込そうとしているが、それは単なる意識系列の上昇過程の固定化するのではなく、存在形態の二重性の分化を連してプロレタリアートを、自ら支配者階級へと階級形成して行く、その中核の媒介者としての先進的労働者集団の矛盾を、転換の止揚として取革集団としての主体的位置とその役割を明らかにしているが、共産主義者—取革集団の論理的主体は、すでに前提とされており、まさしく手段は主体の理性的本性をそのうちに保持するものではないといっている。道具が自然を支配することのできるのは、その主体としての人間の理性が富まれ、その内的矛盾の質が外化し展開しているからである。ヘーゲルの「大論理学」に依拠して展開されているが、国家論—権力論を以てプロレタリアートの存在論からの展開は、それは必然的に形態主義的把握に落ちいるのである。そしてプロレタリアートの階級形成論も、一回的権力奪取、一回プロレタリアートの範囲でしか指定されていない限界性を持っているのであり、従って階級形成論は道筋の道程としてでしかなく、レーニンの「何をなすべきか」に依拠して展開されているが、何よりも党の論理的主体の内容が一切解明されていなく、階級の一部、ないしは最高の形態としての党としてしか、一

般的にしか規定されているに過ぎないのである。すなわち党は不断に媒介的手段としての、機能として物化させる傾向を持っているのである。大衆の自然発生性的内的矛盾、二重性の外化、展開としての党として限定されているのである。藤本進治は、レーニンの社会主義的理論、意識は外から持ちこたせるのみであるという帰結を、その内的根柢の意味を、プロレタリアートの存在の本質と形態に於いて用らかにしようとした党は、すべりた向題意識である。党—先進的集団—大衆というその階級斗争史観にもとずいた弁証法的関係を明らかにしたのであるが、党の論理的、歴史的主体を、抽象的存在に過ぎないということのみで切り捨ててしまっているのである。党形成の内実がいかに階級形成に對現化して行くのかという関係については、内的矛盾の外化の手段的主体としかたえられていないのである。プロレタリアートの階級形成はその終局目標の到達段階は、階級の消滅であり、古来プロレタリア独裁階級に外化させ、古来過渡期を切り開き共産主義を形成—発展される過程を通じて党と階級の内的統一性を端初的に創出され、共産主義社会に到達、転化することに於いて、階級の廃絶が可能的実現となり、プロレタリアートの自己（人類）解放は、すなわち党—階級同一性を携って自己止揚されるのである。従って党がいかなる古来階級—革命観の綱領的内容に立脚して、共産主義を創出して行くのかとされるのであり、その為に実現すべき権力の樹立に向けて権力の打付に集中的に、革命的実践として凝縮されるのである。その意味に於いて党主体の論理は何も明らかにされていないのである。また資本と労働関係を基礎としてしか展開されていなく、国家の政治支配の關係が欠序していると共に、労働組合はすでに支配者階級の支配形式の一柱として存在していることに無知であり、またその実体的本質は「労働力の販売（K・K）」でしかないであり、その中で内的矛盾の展開は、所詮至者主義、組合主義を越えることは出来ないであり、その限界は党が階級運動の政策としては要求されるが、それ以上でもそれ以下でもないのである。このことを藤本進治に要求してもしかたがないのであり、我々批判的攝取を求めて明らかにしえなかった限界が、典型的には、情況派及びバルカ派として対現されたのである。我々の9

と云う、党形成の弱點として二極分解した所在の指摘と、一早く同Q形成党派の止揚として提起し、権力一党一Qとして指定をしたが、その内容範囲は藤本進治の枠を出ていなかったのである。また党と軍との問題は、ロシア革命の発指との関係、すなわち戦略的には前段既決戦の関係に於いて党の正規軍建設の根拠とロシア革命に於いては、赤軍主義軍隊のひえい<sup>ひえい</sup>を契機として兵士ソビエト=赤衛隊が軸になり具体的にツァー権力を打倒し、その後に本格的に赤軍が糾絏されると云う段階をたどったが、現代に於いては、平時から党の正規軍を建設しななければならないと云う前提であったのである。(d) 7回大衆に於ける党の型論の内実、6回大衆に於いては、レーニン党の建設という表現の外で、あとは同盟規約だけであった。旧レメイ派の組閣主義、至済主義の止揚として7回大衆に於いて中央集権的党及び地区党建設の党の型論が提起されたのである。しかしその内実には反帝戦略部隊形成論であり、レーニンの「何をなすべきか」に依拠し、党派の戦略の持ち込み、すなわち国際反戦争の立場、取場への持ち込みとしてあった。これは自身は至人民的政治斗争の優位性を根拠に、改良主義、至済主義との対決に於いて一定の正しさを持っていたのであるが、大衆運動主義的糾絏相造に党派の戦略、戦術の持ち込みというパターンでは解決し得ない困難を一環してかかえていたのである。神奈川左派NO. 1に於いては、政治斗争の持ち込みから戦争の持ち込みに絶化することに於いて問題を止揚を計ろうとしているが、レーニン教条に陥る危険性を持っているのである。「鉄の戦線」NO. 1 (P55~64)に於いて「過渡期占領に於ける党の性格規定と党形成の主体的任務の指定」に於いて、レーニンの「何をなすべきか」の前衛隊論の現在の再把握を一定程度明らかにして来たが、ここでは再度、外からの持ち込み、云わゆる外部注入論との関係に於いて明らかにするならば、「何をなすべきか」の中に述べられている「至済斗争は、労働者を政府と労働者同Qとの関係の問題に突き上げさせる」だけであって、従ってどんなに我々が「至済斗争そのものに政治性を与える」任々の枠内では、労働者の政治意識を(社会民主主義的)政治的意識の段階に発展させることは決してできないというのは、この枠そのものが狭いからである。同Q的、政治意識は、外部からしかつきり至済斗争の外部から、労働者と雇主との関係の図外からしか労働者に与えらるべきことのできる唯一の分野は、す

べての同Q及び国家と政府との関係の分野、全ての同Qの相互関係の分野である。だから、労働者に政治意識を授けらるべきには何をなすべきか、という点に対しては、至済主義に傾斜を深めている実践家は、もちろんのこと、大多数の場合実践に満足させている回答を与えるだけではだめなのである。労働者に政治的知識を授けらるべきには、社会民主主義者は、住民の生この同Qの中にはいっていかねばならない。自分の軍隊の諸部隊をあらゆる方面に派遣しななければならないということは、レーニンは、いかなる意味に於いて明らかにしたのか、それは、ロシア労働者運動の具体的な歴史的条件を充分考えずに、レーニンの占めた位置を理解するのは困難であるのだ。特に自然発生性と糾絏の値の関係についてのレーニンの考え方について明らかにされた当時はロシアの労働運動は、而ヨーロッパ、特にドイツとを比較した場合、さきめて特殊な条件を持っていた。(この場合は「鉄の戦線」P57を参照されたい)それは、向うの共通の一致した政策を持たない。個々ばらばらの分散した自律性的ないくつかの小グループが存在しており、ロシアの指導者的マルクス主義者連の影響はただその外線部にあふんでいただけであり、さらにそのグループ内では、その力の弱さや孤立などの理由から視野は限られていた。ロシアの労働者運動家達が、大衆ストライキとデモンストレーションのうちに、高い斗志をかきたてているときにも、社会主義的グループは、直接的に実現できる至済要求をかかへたに過ぎなかつた。このような至済主義的傾向が、これらの社会主義的グループを支配しているものであったのだ。レーニンが何をなすべきかは至済主義、あるいは純粹労働組合主義に於ける奇借な取場であったのである。その主張の基調は、大衆斗争の自然発生性は、党の目的意識性と、糾絏によつて、全面的政治暴露を通じて、社会主義の理論はプロレタリアートに対して、外から与えられるべきであると強調されていた。それが社会主義の革命斗争に労働運動が正しく動いていく為の唯一の合法的な手段と規定したのである。この点に関してはトクシーフのローカ論において明らかにされていることと、レーニン自身も語っている様に、ロシアの当時の特定の時期との関連、すなわち社会前、歴史的条件とをまったく切りはなして何をなすべきか論じることとは、またその内容を検討することは正しくないのだ

る。レーニンは駒をなすキカが誤用されることを否定的立場とし、1921年のロシア語以外の邦訳する時、彼には、マルクス・レーニンに語ったことはそのまゝの形での邦訳は好ましくない。(1)解説つきで発行されるならばならない。その解説も、誤りがった適用を避ける為に、ロシア共産党の歴史に精通している。ロシアのコミニストが書くのでなければならぬと記されているのである。これまでの、スターリン、また反スタ、コミニスト等がレーニンの駒をなすキカに、二歩後退、三歩前進を安易に引用され、ナチの暴行運動に、その発展段階がどうであろうか、まったく適用しようものとしてあつかい、そしてその結果、かならずやレーニン主義の教条化、固定化が、また逆に直感的否定から政治的、論理的否定を生み出されてくるのである。日本の革命的なヨクにおいては、その典型は社青同解放派に象徴される。彼らは60年安保以後、ワイルなレーニン主義者の横行の中で、あまじにも、それに直感的反発し、スターリン主義の根拠をレーニン主義そのものに求め、プロレタリアート段階的政治性の徹底した原則的承認、その普遍的、感性的な性格の承認の上に立脚し、現代革命の紛糾論の根拠を確立し、ローカルの直感をもって正しい側面を摘出しつつ行なったのであると称しているが、レーニン批判を党内外の中間層、インテリゲンチアであり、労働者階級は、外から押しこめ対象、補足物にしかない。そしてロシアマルクス主義運動は、少数の中間層の運動であり、存在=意識の二元論に陥っている。ボルシェヴィズムの官僚制の基礎は、イデオロギーではなく、社会的階級基礎にあるプロレタリアートの解放は、プロレタリアートの自らの事業であるとして、マルクスのオーイタニ論に原典を求め、堅固な手稿に立脚し、疎外された労働の止揚=感性的直感、社会性としてのプロレタリアートの措定を行なっている。ここでは解放派の批判はさて置くとして、この系譜は、60年安保以後における共産同盟において論争された流れを挟みものである。すなわちソ連は歪曲したのち、主めがってロシア資本主義の後進性、世界革命の遅延による孤立と客観条件として、その中で過渡的諸政策、諸制度をスターリンが固定化し、拡大して歪曲していた。という支配的見解に対して、この見解を客観主義と批判し「ロシアプロレタリアートが、真に自己自身の歴史的地位と使命を自覚した部分を、階級の中に深く広く持ち込んでいるなら」スターリンは官僚に屈服することなく、歪曲しなかった、その原因

は、レーニン主義そのものの中に、発生を伴って来たとして「職業革命家中心の糾紛としての党」批判として打ちおされた。そして「先駆」ノ号に於ける芳村三郎の「労働者階級の自己権力の党について」である。旧戦線派の革共同へののり移り、集約された以外の部分は、旧大阪中電日共細胞、東京ワン地区委員会の別党グループ、その後電通労働グループに代表される。反スタ(反日共)一反前衛主義の取捨労働者の自己権力論であり、この流れはオズ本UNDにも流布されていたのである。



る口糧派の解体以後の残存として、「前征主義」打倒、それ自身の否定的白書として登場したsect NO.6は、吉本隆明、谷川雁等のインテリゲンチヤアの独立運動をモチーフとしていたのである。川又ル急進主義、戦術左翼主義という革命共同体的清野主義的総括の上に立脚した反スターリニズム前征党の建設に力して、焦点の拠点、独立の思想、大衆の層級のくりこみ等は、まさしく非前征派潮流として定存していたのである。その内容的規定は、吉本隆明の「丸山真男論」の中に明らかにされているがごとく「レーニン前征論」に対しては、コントラ「前征」論をハーケル以後の弁証法においてはコントラ弁証法を必需としている。「前征」論及「前征」主義に描出される過程をいさぐ方法は、レーニンの「前征」論の範囲では保証され得ない。レーニンの「前征」論を必然的なダイナミズムによって「前征」主義にまで描出される過程で、人民的な志向の核と必然的な矛盾あるまでに、それゆへ政治的な実体をさしている。労働者階級の描出された利害共同性を理念として成立した「前征」論は「前征」主義にまで昇華する過程で、必然的な質的転換が起こり、ついに人民的利害と前征的利害のあいだに、あるいは、人民的生活史と前征的生活史のあいだに価値的な転換が起こる。「個人崇拜を単に特定人格の崇拜ではなく、ほとんど全ての共産主義によるスターリン理論の総体化として現われた事は、何も先天的に「权威主義的性格」だったなりではない。ここでは、スターリン理論はブルジョア的の組織的団結のシンボルとしての機能していたからこそ、同じ陣営内における「理論」へいかなる疑念も団結に水をさすものとして取扱われたのである。党の路線から偏向しないものつという恐怖と警戒のあるところ、思想と言論の上部への同調者の傾向は不断に発生する。むしろソ連における正統病は時的に帝政ロシアにおけるギリシャ正教と国家権力との合一の思想的遺産に帰らせる面があり、ちょうど、日本共産党が「団体」的正統性の思想的遺産を、裏返して受けついでいるように、又世界的環境におけるコミニエストの正統病は本論の冒頭に暗示したように、一つに未だ対外的に自己の布せを意識している革命団体の心理習性であり、一つには政治状況の緊迫性と対抗する両極に等しく刻印ある思想様式の産物なのである。

政治的には、極性の緊迫したダイナミズムを強いるものはされている。この理解は、資本主義国にわがれられている社会主義建設を強いられなければならないソ連、あるいはロシアの急進性によって歪められた「前征」組織という間知の理解の任務をあまり出るとして春られていない。スターリニズムそのもの実体的分析はそれによってさげられてしまっている。スターリニズムは必然的に質的権力な中層的クラスに「前征」主義として移行し、上層は理論的シンボルを、下層は無備の実践力を行使せざるをえなくなるころの「前征」変質の過程を意味して、労働者階級の理念的な代表であった「前征」は、次にその実体的存在は、ついにひとつの束じられた理念的な世界を完成する。たえみ党的問題意識を排せざるをえない上層でもなく、又、たえみ大衆と接触せざるを得ない下層でもなく、総体的世界から大衆から隔離された中層クラスに他ならない。

フルシチョフから思えばスターリン主義は、下層によるスターリンの個人崇拜であったが、しかし実質的にはフルシチョフのよりな下層クラスとスターリン主義の実体的相違であったとみるべきである。以上を吉本のスターリン主義批判の根拠であるが、その政治的結論において、反スター反前征主義の立場と共通的内的論理性を持っているのだ。また谷川氏の処女作「三池斗争」との対比のとともに、その根拠を日本社会の二重村道から、都市の下層のこびりた大衆エネルギー資源と地域社会の土着的エネルギー資源から、焦点の独立集団の大正行動隊等は、大衆エネルギー論、大衆ナショナリズム論、この種は思想的流れは、前征コミニケーションの否定という思想的根拠がある。この様な系譜は旧独立社共同の、吉本独立論から、平田秀明の共同体論へ転せんと、思想的共同体集団として論理したのは、他ならぬ神津君の叛旗派として出現されたのである。さらに「情況」の85頁119頁に展開されている。長崎浩のアジテータ・大衆・党の叛乱論もその内にある産物であるのだ。日共から分離して形成されて来た日本の革命的左翼の潮流は、スターリン主義とその前征論をめぐって、さまざまの思考索求して来たのであるが、その内に、才乙次BUND内部に組織的スターリニズム=非前征主義を宿っていたのであり、これらの根底的対決を通しての止揚をおしはかることに向われていたのである。



この二つは皆の軍事問題を媒介として、より鮮明にされて来たのである。この点に關しては「鉄の戦線」のNOI (P73) において後進派の根底的解体のために、70年台後半の現局面における。大衆の自覚発生性=ノンクート主体性革命派に依拠する社会革命派との党派斗争の位置において明らかにしているなどとして軍事反対派、批判の自由の沼地派としての本質は、党の正規軍(赤軍)に対して一帯して全兵士の統一軍用論を対置し、党の軍事を組織することは「気狂いに刃物」であると述べて、スターリン主義であると反発した事は、何れも党の軍事を組織する事な問題なのでなく、いかに全人民武装を階級的に委ねておけるかの問題であるのだ、我々は過渡期世界の「労働者国家」即ち、「過渡期国家」を党の正規軍(赤軍)と全人民武装と武装の内実としての基準を明らかにしているのである。以上我々の内あった階級形成党派の論理的、歴史的な内在的弱点を現時的に対象化をはかり、ローゲ、ルカチー、藤本進治等を主体的に再検討をはかり、同時にレーニンの「何にをなすべきか」前征組織論の現時的あてはめ、引き写しをわなく、その継承、発展し現時的再把握の視座に立脚しつつ、旧共産圏内部に、スターリン主義と前征組織論をめぐって定在していた思想的系譜を歴史的に検証、論証をはかる過程を通じて、反スター反前征主義の内的外的思想的根拠をの解し、それと党の軍事を組織する命題において、最も根底に亘る意味とその普遍性を鮮明に明らかにしたのである。特に理論戦線8号の「革命論方法論上の主体的立場の解明」の中の、Ⅲ。スロバチア存在の論理に關して、藤本進治依拠してほぼその全面的にその内容において展開されている。これと関連において次頁のDの党的飛躍の内容として、総括を媒介として明らかにされていないのであるが我々は先の究解において明らかにしているのである。(5) 同題7回大会の位置とその致達点、組織的根拠の獲得の萌芽的の第一歩としてあり、6回大会の三段階永続革命論に対して、世界同時革命を提唱したのである。「先進国-後進国-労働者国家」の階級斗争の三つの有機的結合を保持している。云々ゆる三つの同時革命論を「世界革命綱領」に高め豊富化せねばならない。スロ

バリア国際主義の基本的任務として、①帝国主義打倒、世界革命を掲げるスロバチア独裁の樹立、②帝国主義政府の侵略と抑圧と反革命粉砕、③民族解放、社会主義革命、④労働者国家人民の一切の反革命粉砕、⑤世界革命を放棄し、スロバチア独裁をさしどつある労働者国家の党官僚打倒として確定されたのである。これは6回大会の「ロシア包囲体制」、「ブルジョア議会体制」、「ドル・ポンドIMF体制」の三つの体制の成立は、「ロシアの労働者国家」、「後進国等はおもしろ白紙になっている現代世界包圍に対して「過渡期国家」の主体的概念をドクし、世界革命を地球上で完成するまで、帝国主義世界からブルジョア権力を打倒して離脱したスロバチア独裁力を握った非資本主義社会(過渡期社会)群の延長上に、社会主義社会は勿論、その低い段階として社会主義社会を築くことは不可能であると判断し、更に帝国主義包圍下の過渡期社会のスロバチアに世界革命の根拠地任務を要求するといふ前提に立つ、帝国主義の包圍下でスロバチア独裁力を握った過渡期社会は、一定期間国家を形成せざるを得ない。従って、労働者国家は旧社会制度の母胎と帝国主義による包圍のために「世界革命後の過渡期社会なあるべき基準」ならぬれば、常に歪められざるを得ない必然を持つ、労働者国家を歪めさせている党官僚を粉砕する基準は次の四点である。

①世界革命の根拠地として労働者国家の任務を位置付けること、②この路線の下に他党派の存在を認め、スロバチア独裁の権威、③歪められた労働者国家の基盤に立って、スロバチア独裁内では党派斗争を通して世界革命戦略を要求する前征党の存在と任務を要求される。④前征党と旧社会の母胎と帝国主義の反革命によって歪められる可能性をはらんでいる。従って前征党内分派斗争の自由は保証されなければならない。以上の四つの基準に反する党官僚は打倒の対象となる。労働者国家内階級斗争の性格を決定する基準でもある。我々の「スロバチア国際主義の基本スローガン」をのびゆる根拠は、正に「レーニン主義原則の現代世界革命における復活」をなすことである。トロツキーの如く「労働者国家の無条件防衛」を主張する目的ではない。ソ連東欧の労働者人民

に於て「世界革命放棄し、ソロウリア独裁をさだめたる労働者国家官僚打倒」の三つを要する。ソ連の階級斗争は、トロツキーの云く「補足的な政治革命」では不十分であり、世界革命の一環に組み込まなければならぬ。批判の対象である毛・林路線—ケバウ・カズ—口路線とは国際階級斗争を通して、彼らの世界革命路線の転換とレーニン主義原則の現代的復讐を要求せねばならぬ。又「後進国人民の任務は「民族解放・社会主義革命」である。従ってレーニンの民族解決にとどまりえず、後進国階級斗争の国際的性格、従って帝国内部階級の階級斗争と同時に結合した国際階級斗争としてこれなければ、勝利の決意を越えられない性格としてある。この七回大会の世界階級革命の任務は、又々打倒の革命的基準（最大公約的）と民族解放社会主義・暴力革命・ソロウリア独裁のレーニン主義の原則的復讐としてテーゼ化されていた。これはオムインターのトロツキー—教条主義の「反帝・労働者国家無条件擁護」「植民地革命無条件擁護」のレーニン民族解決の無原則的—一般化よりは、はるかに超えた内容として提起されたのである。いせんとして中央派に対しての基準は、批判の対象としてしか確定されていなかったのである。正しくオムインターのオム次草案（綱領）の視点を、現代的に対象化した出発点として位置していたのである。それはオム次BUNDにおける極端理論の「自衛共産主義、オムインター」論を継承するものとしてあったのである。この七回大会の内容は三つの階級斗争論は、帝国内部主義包圍論を主軸としての過渡期世界論としてあり、革共同盟派の帝とソの相互浸透論、相互依存・反論として二元論的現代世界把握に対して、明確に党派性を保持するものとしてあった。国際共産主義運動の主体的反省過程を対象化し、スターリン主義の主体的歪曲の弊については、物質的根拠の解明に限定されるのではなく、トロツキーの補足的な政治革命では不十分だといふ指摘にとどまらず、又民族解放社会主義とこの規定は、一曰社会主義を承認する思想的立場を持つ弱点をばらばらしたのである。この七回大会の限界性は、岩田自衛資本主義論の否定とその反動からレーニン帝国内部主義論の機械的アテハメタ発生し、この自己矛盾から労働

者国家を一律的に根拠的國家論にある事に求められる。そこから攻撃的階級斗争論のみちびかれるのである。この点に於ては「鉄の戦線」NO Iにおける「同盟の戦略問題における理論的総括」の中の08・3論文の意識と致命的限界、08・3論文の承諾なソロウリア独裁と単純に矮小化して行く根拠はどこにあるのな、等を認を願う

(8) 同盟8回大会：2000の位置と到達段階、7回大会の限界性の根底的止揚を、8回大会2000を媒介として克服するオム次歩を開始されたのである。世界ソロウリアの端初的規定、今までの世界革命=ソロウリア的關係に対して、マロウスのゴ—ウ綱領の再把握ならぬアロウ—テを持つて確定し、又レーニンの「国家と革命」のオム五章の概念的規定の形容矛盾であるばかりではなく論理矛盾であると卷之を鮮明にしたのである。そして同時に世界革命戦争の概念を導入したのである。同盟が世界党—自衛赤軍—自衛反帝統一戦線を通して世界革命戦略を提起する段階において、旧来の戦術—戦術の止揚を向われ同時に綱領視座の深化として世界共産主義論、世界ソロウリアの創造的内在を決定的に要求されていいたのである。この様な党的武装の団結の基礎の上に、党的主体の飛躍をたわわていいたのである。そのことは党の綱領—戦略—一元的に主体的に把握する方法—体系において獲得であり、又同時に世界革命戦争論の内容的—論理的内容の解明を通して、革命の中枢の問題としてこの党の軍事問題な同盟にとわわていいたのである。この点に充分解答なし得なかった点こそ、七回大会の根底的止揚を確立できていない限界を8回大会は持っていたのである。その手を取りをつかみどっていった点において過期的意義を携っていたのである。同盟内において8回大会はクーデタ大会であった等と総括している諸君がいるが全く問題外である。同盟の党的危機は、69年4・28斗争のその組織的過程も含めて、一挙に顕在化し、赤軍派分派の結成を作り出し、彼らは7回大会—08・3論文をより一層無限的に極端化し、10月武装蜂起=臨時革命政府樹立論を朝鮮危機—11月日本ソロウリア論をテ—テ上げたのである。このことの直接的契機は、4・28斗争の突撃隊・反戦行動隊の兵力との攻防戦に敗退した、敗北的心情に捧腹し、その心情的情念を

イメージ化し、そのことをなすつる党の革命を  
さけび、この時点同盟は権力の破防法の攻撃を  
受け、同盟中枢にかけら、同盟の組織的内外打  
造の動的ゼイ弱性第一等に表現化され、同盟の  
組織機能マヒ現状の中を、論争それ自身、無政  
府の動的に進行していったのである。確かに  
赤軍派は情勢と同盟の主体的危機に対して、政  
治的直感として敏感であった。その解決の方  
向性は、過去への反動的帰結(初期オースト  
リア)あるという内容であったのである。何か  
しら赤軍派を発生させたのは、8回大会に全て  
責任があったら故に一部では語られているが、  
素直に言って彼らは一切の責任をなさいと言は  
ない。そのさうな歪な部分は自分らの主体的  
総括を対象化しなすつとしない証である。我  
々は8回大会に於て岩田の多元的回家論階級配  
置論という権力論を否定して以来、8・3論文  
合同権力論の弱点を克服するものとして、8回  
大会に至る帝国主義権力の先行的再編一先行的  
ラシスシ論が提起されてきたのである。それは  
この回大会のなすつとあしラシスシ論とは異な  
らな展開していったのである。又、マル戦派の片  
切組合ソヴェト論の止場以降、トロスキ一統一  
戦論論の弱点を拡大した岩田理論を止場し、ト  
ロスキ一を批判的に再取り、反帝統一戦論論を  
打ち出したのである。スペイン内戦の総括を現  
代的教訓化し、先行的・計画的帝国主義権力、  
ソコ独派、人民戦派の三つどもの攻防関係を  
めぐる東大岩田攻防戦に到る総過程における。  
権力一政府と日共人民戦派との一時的密約、  
(加藤体制)ラリリスと日共民衆との密着)権  
力と三派一全党との再離、任幹四指、権力と  
赤席派の密約は、権力側の否定・拒否による大  
衆的幻想の破綻、分解、ソコ独派の登陸を教訓  
化し、統一戦論論(反帝統一戦論)として階級  
関係論としてより定式化していったのである。  
即ち、日共民衆は公然と権力の反革命性として  
凶犯反革命武装刃鋒をはかり、まさしく権力  
斗争一政府打倒斗争の過渡への突入は、相対的  
独自のソコ独派の階級斗争の陣型を構築を回家  
市民社会との関係において形成されていたので  
ある。従ってその内部において、総括一戦略を  
めぐり、その統一戦論を軍事武装の領域までの  
態を持った再編強化を同時的にとわれたのであ  
り、この主体の二重の飛躍は、党の純化と赤派

斗争と権力を一体化して展開しつる党の主体  
的遂進打倒を要求されていたのである。従って  
中央権力斗争一マッセストライキ、ソヴェト  
運動へと発展していったのである。しなした  
衆(階級)と権力の基軸関係として、党々その  
両者に媒介的主体としてかゝり存在として、如  
権力斗争の極限的領域しな対象把握をさす、党  
建設団体の内実において物象化しつる党主体へ  
と自己対象化をはなる革命的实践の党的作業、  
計画としての戦術の主体的先行進歩はかるこ  
とを不可避にとわられていたのである。その転  
倒=革命的価値観、即ち、階級斗争史観に裏つ  
ちされた党史観へ止場な性格的に向われている  
際に対して、しななる総括的内容な、権力打倒  
への接近への戦略展望のみならず、確立すべき  
未来の権力、ソコ独派一統一の内実の獲得  
した党の武装の下に党の正規軍の主体的創出  
な問われていたのであり、その聖なる主体的獲  
得なない限り、同盟の組織的再編を三つとらな  
い限り、階級斗争を革命的領域しなない意圖  
はあり、それは情況一振復部分な主張していた  
政治格闘の真一般の転換ではなないのである。ど  
れは日米の下からの党建設、権力への接近では  
全軍斗、片斗争の凶犯武装への狂騒とそれへの  
宿願を生み出され、スウの震として反スウ潮流  
やノンセクトラジカルの現代無政府主義(カン  
テカリスム、テロリズム)無党派主義に対決し  
つる団結の態な根底に要求されていたのである。  
この命なけの飛躍なない限り一歩も進めなない  
のとしてあったのである。昨秋斗争の総括を通  
じて、ロー下のソコ独派一統一の凶犯突進性  
に立脚した政治斗争、至道斗争の結合論の止場  
トイテの分業論に立脚した分業マヒ論や、中  
マッセストの党の斗争一武装の組織論格闘の  
斗争戦術形態論の革命型を二つから取り、七  
党の聖を規定したり、また日帝権力打倒把握な  
らみアスローチされる革命形態論は、結局そ  
れ自体、党と階級の一貫した内実規定な欠除し  
ぬら党々(同盟)な依拠してしる現実的物質的  
基礎の内に形成される不測の凶犯突進的反映、  
持ちこまれる傾向に対して、非階級的党派斗争  
を通して形成する事を、~~き~~意味するのである。

(11)

(14)

(H) 9回大会と党一軍、及びソビエト運動の諸問題、9回大会の基調は、党一軍-武装ソビエト運動論、乃至「平時からのソビエト運動」として提起されてきたのであるが、昨秋内争の主体的教訓化を通して、党一軍-統一戦線として発展止揚はなされて来たのであるが、9回大会の総論政策的には党の正規軍(RG)と、反戦、全共闘武装行動隊論として打ち立てられ、10、21内争の事前的敗北を厭する中で、RG-AIFVと新たに止揚する方向性の基に11月内争を主体側から、みるならば部分的勝利を実践的につかみとったのである。

この糾括過程を媒介として、ソビエト運動論の根底的糾括を要求されてきたのである。この契については「鉄の戦線」No1.の過二期古界の党主体の措置の中で、党一軍との関係にめぐみ、都市蜂起-ソビエト型革命は、主体的内実の(内)、形態、型論に落ちるのであることを、革命運動の下史的反省過程と、その対象化を通して、一定程度展開してあるが、さらにウイボルクNo13に於いてソビエト運動主義批判として明らかにしているが、再度ここに於いて、ソビエト運動の糾括をまとめるならば、何によりも、その理論的基盤となっていたのは、トロツキーの「統一戦線の最高形態としてのソビエト」である。時に「戦線」号の内容がすべてこれに依存して展開されてくるのである。すでにこの契にあいては、「先行性ソツスム論」の中にも、そのトロツキーの弱点、限界は指摘されている。現代的に再度把握するならば、トロツキーは30年代の古界激進期に対して、永続革命の視座からドイツを弱環境として捉え、グイマール体制の崩壊過程の権力相対性を、中間政府をホナリスム政体として捉え、そこから二重権力を展望する視座に立脚し、レーニンのホナリスムを明確に提起しえなかつた。ヨーロッパ、ロシア、ソビエトに対する統一戦線論と権力論として提起した契はすくられた内容である。すなわち社会ソツスム論に結晶した、コミンテルン6回大会の統一戦線論=社会解体論の止揚として、権力論と階級配置論、統一戦線論をソビエト、ロシア、ソビエト権力論として提起した契は、その内実、社会幹部の右傾化と下部労働者のソ、左傾化、を招くという政治力学主義、主体なき階級図式主義的傾向を拡大されてあり、

社共統一戦線の成立の根拠を求め、わすれなから工場委員会の自然発生的登場という契に着目しつつ、社共統一戦線をソビエト権力へと発展させるべき基盤があると規定したのである。まさしくトロツキーはまず、ホナリスムにソビエト権力を完成させた国家における議院と労働組合、その他民主主義的諸制度の権力構造をロシアと異なつてくる契を捉えられていたこと、ホナリスムスターリンの鎖につななれたテーマンのドイツ共産党、社会加入戦術の社民内補完的左翼反対派ではなく別個なロシア独派の建設となつて来たのであり、スターリンとの党派内争にも完敗物神化、党派内争の欠序、及び党組織論、党軍事論(蜂起、赤軍)階級武装論の欠序、であるのた、従つて「統一戦線の最高形態」としてのソビエト及びロシア独派は、党と軍の党的中核の内実を規定を捨象した、政治力学主義統一戦線論に落ち、のである。またソビエトを目的意識的側面-武装蜂起機関、自然発生的側面-自己権力論、労働者の生産管理と云う直接民主主義の機関と云うソビエトの二重性という二側面的把握は、党形成、階級形成の平行的な二元論になり、党は外在的なものになってしまうのである。さらに権力奪取以前に、なにがし部分的であれ工場、生産管理が可能であると思考すること自身まったくの幻想である。すなわち工場占拠のつかみとった上にソビエトを考へているならば、この様な経済主義的ソビエト物神論者に対して、現代ソビエト運動として、権力と党の主体的攻防関係において、ロシア、ソビエト階級の先進的部分をソビエトと権力奪取と形成し統一戦線とする反帝統一戦線、すなわち権力打倒の政治的統一戦線に結集、形成することを強調されてきた。「権力・党・階級」の云う視座から、権力の先行的、計画的な戦略的攻めに対して、党を武装し、党

階級的成熟を練り上げ、実力武装斗争へ高める。革命的諸党派の統一戦線に結集する武装部隊、これに結合させる。そのための組織化と統一戦内党派斗争と結集させる。大家の止揚の闘いの連続。すなわち権力に対する、党派の組織する戦略的政治部隊と党派の中央に直割された戦略軍団＝革命の正規軍の中核による突出した先端における権力と党の巧術を軸と階級を武装させ、権力を奪取をめざすリビエト運動として階級形成を促す。リビエト形態の本質は、権力との街頭武装斗争にあり、そのことを通じて、地区的、夜別的に全共斗、工場委員会、トトライキ委員会が組織され、自衛武装を形成、赤衛軍を形成する。それには、まず、社共の脱党主義、人民戦線派党と決別した暴力革命戦略とマル独権力を確定した党派を中核を確定しなければならぬ。以上我々は、権力と党の巧術を軸と階級を武装させる前提的視座を確定し、権力と党の軸から階級の内幕をとらえるという視座を、権力論を軸として提起したことは積極性を帯びていた。それ以来の権力と無規定な階級の媒的段階としての階級という大衆運動主義的傾向を一步止揚するものとして階級階級論を確立したのである。そこから党の目的意識性による現代ソビエト運動として定式化した。しかし、権力、党の軸としての党の主体的論理性及び最も主体的党(変革主体)の質とその内実性を規定することが鮮明に押し得なかった点こそ階級階級論の弱点であったのである。

### 上巻 第三

以上を主体的統括を媒介として提起して来たが、リビエト型、ないしはリビエト運動とどちらの表現をとろうとも、党の軍事-武装との関連をめぐりては、0.0斗争委員会、個人加盟という、純粋な直接民主主義の役割としてリビエトは創出される筈と云うことは、まったく問題にならないのである。帝軍解体-正規軍建設-リビエト型組織建設というパターンは運動組織形態論として平板化されており、何よりも党-軍-統一戦線の党組織の内実構造を獲得することであり、運動構造一般で

はない。この点に就いては、鉄の戦線M.D.「党が組織する軍事に対する基本的組織方針」(P.61~65)を願う。我々は昨秋斗争の主体的教訓を通して非合法-軍事を組織する党への実体的経路をつかみとったのである。

## ② 過渡期世界の党主体的規定 = 形成

69年の東大守田斗争-4・28井繩の過渡期に於いては、党に軍事が要求され、又その組織的内容の規定が、いかなる共産主義占拠を獲得するかという命題が党にゆわれはじめていたのである。それは軍事委員会と組織委員会として端的には表明されていたが、このことを統一的に止揚しようする党的団結の基準を打ち出す、このことに対して明確な解答し得なかった。今日に於いて新しい質を持って継続されているのである。「イズムNO.12」「先ファ」に於いても「労働者国家」を切る基準をゴータ綱領にその軸を求め、トニクリフ、対露との論争の整理をも認め、最低明らかになされていたが、組織-戦略の内的関連としての方法論上に於いて、一貫したものとし得なかった限り性を帯びていたのである。従って「未来学」永遠の彼岸と単純戦略主義との分裂が形成されたのである。「先行性ファシズム」論に於いては、過渡期世界の党が現代的にその思想-国際主義を立脚点にと定めることなく、何よりも占拠マル独-占拠過渡期の党の在りを我々が過渡期占拠を先取りしていかなければならないことを鋭く指摘することは提起していたのである。すなわち「先ファP.23」と「占拠占拠マル独の共産主義への全過程に占める位置に最も象徴的に述べられている。「現代占拠の物質的階級条件を確定しつつ占拠階級主義権力とスタ官を打倒する戦略の領域と科学的に占拠過渡期から占拠社会主義に接近する方法と初期マルクス階級論(至哲手稿、労働階級論、ドイツ階級論)を根拠として、これにゴータ綱領批判、反フェーリング論を結合して人間解放の認識過程から主体的に社会主義へまい進する思想的方法を結合する命題は、マルクシア国際主義の思想性に現代占拠の物質的矛盾から過程の論理を与えて論証し、未来に物質化し得る思想として闘う主体の思想に高めることによるのみ解決するのである。これが我々の思想性であり、この意識性が階級主義、後進的「労働者国家」を闘う人々を民族と人種

これが我々の帰趨性であり、この意識性を帝国主義、  
「偽の者回家」を叫ぶ人々を民族と人種を超克  
して人類ならどうかという帰趨性である。未来に物質化  
される過程に現代世界の物質的基ソから論証される  
社会主義観と人間解放の要求は結局、疎外革命の論理  
力を獲得しえないであろう。物的条件の分析で論理と  
社会科学から人間主体を捨象する機械的戦略主義、聖  
済主義は、プロレタリア国際主義を統一行動の機能的  
結晶の論理に依り、民族と人種を超克するマルクス主  
義の人間解放の論理とは高めえないであろう。

この過渡期社会論の現代的帰趨性を理解できず、こ  
れを「革命の未来学」として歪曲する者は、理想性を  
ミイテオロキ一抜きの単純軍事力学主義に墜落する  
であろう。すなわち世界社会主義のために、世界プロレ  
タリア過渡期を世界革命戦争を期し、旧民族回家  
を超越して、労働の量による配分を豊徴させる意識性、

この理想性こそがプロレタリア国際  
主義の内実である。この主体的意識性=理想性を戦略  
化するものとして世界党を準備されるべき時、3マ  
ソツ7の国際階級闘争を指し示す党は、未来において  
物質化される理想としてマルクス主義を人種民族を超  
克する理想として獲得するであろう。

以上のように提起されている。しかしこれが党の論  
理的主体として体系化しなかつたところに弱點を存在  
したのである。即ち未来を獲得すべき世界共産主義を  
切り開く党=世界党の内実を、人類前史と後史の南幕  
との回転軸として内にもつ世界プロレタリア-この「獲得す  
べき世界プロレタリアと世界党との関連(樹立すべき権力)」  
と「打倒すべき権力との攻防関係」との両面からはじ  
めて、党の党たる質は獲得されるべきものである。そ  
の意味において「暴論 ケーヅ」の方法論-「古  
革命戦略は現代世界の基本矛盾を形成する帝国主義  
の国際経済危機を基底とする具体的国際階級の危機の  
発現形態によって、ほぼ戦略確定の客観的基要因が  
決まってくる。しかし至極危機は世界革命を自指す革  
命政党にとっては客観的条件にすぎず、主体的部隊力  
とプロレタリアート権力奪取を意識した階級に形成す  
る方針と結びつき、はじめて戦略たつものである。

政治党派の戦略な党派によって異なる根拠は、党  
派が依拠するキボンの利害の反映である。しかしプロレ  
タリアートに依拠する革命党派自体根底には、やはり帝  
国主義に対する把握の問題を厳然として存在しているの  
である。

この引用をもつて危機論戦略を止揚した戦旗シリー  
ズと同大風の色紙においてその枠のせまさという莫大指  
摘されているが「実現する問題の立て方にあり」、「帝国主  
義に対する把握の問題を厳然として存在しているの  
である」これ自身を誤りではなく、これをすすめてである  
ということが問題なのであり、世界革命=世界プロレタリア  
<sup>実現する問題の立て方に対して</sup>、

実現  
する未来の内容が問題であるのたという指摘は、前者と  
対立させて問題を立てるべきではなく、その内的統一を  
党主体において普遍的に対象化するものとしてあるのた

旧ソ連の崩壊以後、特に東京においては、革共同系  
など建設批判に接近し、ソ連系(カズ次社会学同)は帝  
国主義論の解明として進行していった。その中でも典型  
的には、岡松浩「現代革命の模索」の中での新左翼運  
動の存在理由の序説に端的に示されているごとく「新左  
翼運動の存在理由は資本主義の下史的現段階との奥わり  
に淵源する。それはまさに、レーニンとその同輩なつて  
当面したところと類化的である」「マルクス主義運動が  
またそのカ/段階、即ち金融独占資本主義=帝国主義段  
階へ移行した」ここを開始された「修正主義論争」にあ  
りて「エリシュタインを中心とする修正主義派は、資本  
主義変容を感知し、いち早くそれに即応したな、彼ら  
は、新しい発展段階における資本主義その本質的規定性  
において分析しえず、新しい現象から誤った結論を引  
き出した」「カウツキーを中心とする正統派は、資本主義  
の変容に対してなたくなに目をこらして、単に教条を対  
置する」にとどまった。

「レーニンとその同輩は、エリシュタインを指摘した  
とき資本主義の変容に対して目を開きつつも、マル  
クス主義理論の原則的妥当性を追認し、この限りにおいて  
マル、エンの古典的教義を獲得しつつ」しかも一方を  
帝国主義を単に「政策」として見抜けぬカウツキーを批  
判し、帝国主義を資本主義の新しい発展段階として把握



し、マルクス主義を創造的に発展させ、これによつて「オ2インター主流と対決」オ3インターへ、そして現在の状況をシューマ化すると、「資本主義は帝国主義段階から更に新しい発展段階 即ち国家独占資本主義=集産主義の段階に移行」その例として「中ソ論争」=昔のオ2インターとオ3インターの論争として中ターン化し、ソ連=スルジュタイン 中共=カウツキ-「なつ中であつた」資本主義の新しい発展段階である国家独占をその下史的な社会約体にあつてどうえ、オ3インターの未裔と対決している新左翼であると規定されているが、この方法的把握の対象の認識は ML派、マル線派、独立派の共通の基盤であつた。

それは階級論争論的には日共の二段階革命論、対米従属論に基づき「民族民主革命」に對置して帝国主義打倒暴力革命論、プロ独のレーニン主義の現代的復讐の綱領的立場のもとに日共の党派論争を主軸にして、60年ヌンドが登場したという意味ならまえるならば、ある意味では必然であつたといえよう。逆にその時局にあつて黒賢等は日共と同じく「民族民主革命」をこゝなえていたのである。このことはオ2次ヌンドの結核の一視角でもある。日共共産主義運動の下史的主体にあける反省的対象化（それ自身不連続の連続としてしなな）をアプロ-キしきれていない（弱さであり）、反帝絶世主義を生み出す思想的樹地でもあるのだ。

オ2インターなり、オ3インターへの転換な、オ1次帝国主義戦争をめぐり、社会排外主義潮流の党派論争との対決をはずみ、カウツキ-の超帝国主義論なり、レーニンはヒルネ-ホインの金融資本論を批判的に接収し、つア、レーニン帝国主義論のドラマチックな論争を媒介にオ3インターの結成を獲得したのに対して、過渡期世界突入以降のオ4インターの登場及びオ4インター内部自身の論争な「労働者国家」の評価をめぐり、トロツキ-教条主義問題を召み、IPプロ派、とキャノン派は、日本にあつて西分派、大田竜派、黒賢派の革共同系の党派論争は開始されたこの意味を、いかに対象化するの方向向われていたのである。このことを我々は過渡期世界論を主体的媒介軸として、主体的に獲得しようとしてきたのである。

すなわち「資本論」「帝国主義論」「過渡期世界論」の内的関連を唯物史観として、変革対象の論理性を把握し返す方法論として明らかにすることである。唯物史観な人類史を、前史と後史に分けるところから、前史から後史への突入の過渡として、過渡期世界を位置づけることは出来るのである。しかしここで本来の意味での過渡は、世界革命を分岐とする世界プロ独下の世界の過渡期であります。過渡期世界は、未だ人類前史の資本主義最後の帝国主義段階でありながら、対象世界（帝国主義）の一部の党が権力を握つたために、党に変革新体を自己を過渡期国家に対象化（外化）したからです。過渡期国家は党=変革主体の変革対象に對する未完の変革としての対象化であり、従つて、対象世界は革命世界として指定されたわけである。所を「この未完の変革として対象化を過渡期国家を、いかに認識するか」によつて過渡期世界の性格は変わつてくる。即ち、世界共産主義（広義）の発展が世界革命を媒介とせず可能であるが、ないわけである。可能であれば、過渡期世界は「未完の過程、変革世界」という意味が一部に後史への旅を保障された口と、一部に前史へ止まる口と併存するという把握になり、我々は未完の革命における過渡期国家は世界革命を完成させないがぎり、後史へ発展移行しえないと考へている。従つて過渡期国家の「史的」性格を規定するものは、世界共産主義-世界社会主義の原理である。この基本基準（人類後史においてカクツクべき基準）によつて旧民族国家の中で過渡期国家が、この原理をカクツクするのかが、検証され、過渡期国家の「史的」性格が、後史、又は、前史に属するのかが決まってくる。この未来のカクツクべき世界は、その原理的基準は、何によつてカクツクされるか、これがまた前史の資本主義を究く普遍本質的原理を検証し、これを止揚しつづけるものとして結果として研立される。ここから過渡期世界の他の論理主体の現代的基盤が明らかにされるのである。

従つて「理論」の日向能文に展開されている、二つのガイスト作と決定的に異にし、そこから結果、綱

鏡一或路を一元的方法的内容として、導き出す事は出来  
ず、もしも、果實と同様方法の空振り、バツテングコ  
ー干にしが存らないのであり、変革対象に対して変革主  
体の革命的実践の基準が不鮮明、かつ確定しえず、後は  
「下場所的立場(空向性)」を持って主体規定還元主義と  
「対象法の科学主義(字の三段階作の絶化)」にとどま  
り、思想的には近代合理主義である。

この点に關しては次回に於いて全面的批判を行うこと  
とする。



## II. 『戦旗』派内分派斗争への視卓

共産主義者同盟における党内斗争が、90年代前半の工作とその破産を契機として、分派斗争の段階に入りつつあるとき、我々にとって、その意味と、それをどのように止揚し、他Fracを解体していくのなという政治的、理論的、組織的展望を向われていると考へる。我々はその作業に入る前に自らの位置を国際階級斗争史との関係を含めて明らかにせねばならない。この小説はそれを目的としている。

### 1. 階級斗争の現局面と、BUND「戦旗派」内分派斗争の位置

70年代階級斗争の幕を叩いて落すべく準備された昨秋安保決戦における、我がBUNDを始めとする左翼独派の政治的軍事的敗北はその決戦そのものを要求した軍事の責に耐え切れぬ部分をBUNDから追放すると共に、新しい責の党内斗争への移行を要求した。即ち、軍事を組織する党への同盟の飛躍をいかにして実現するのなということ、これである。しかし、我々なここで注意してあめねばならないことは、この党の革命一オ三次BUND建設の作業そのものを、一般的に昨秋安保決戦の敗北によって要求されていると考へることは、基本的に誤っているということである。我々は、あの69年10月21日におけるみじめな敗北から11.16斗争へ到る過程で、我々自身の敗北を、党組織論の敗北として対象化し、RG-AIFの構築へ向っていった。9回大会において、いまだ、機能としてしな把握されていなかった党の軍事な、党なRGをより拡大して組織し、その責に規定されつつ、AIFを、RGを生み出すものとして組織しようとしたこと（この理論化は11月斗争后にもちこされたな）、そのことを通して、党そのものを、党の軍隊（正規軍）としてのRGの責を政治-軍事的に獲得しなければならぬことを指し示したのである。いいなえるならば、それまで、党の暴力装置といった程度の意味あいにおいてとらえていた、党の正規軍が、党の責そのものとして対象化される段

階に達しつつあったということである。我々は安保決戦において、帝国主義権力と人民戦線派との対決に確に敗北したのであるな。それは、ななる意味において、党主体にとっては敗北一般ではなくその過程のななで、70年代階級斗争一恒常的武装斗争・蜂起・内戦・世界革命戦争に勝利する党組織の建設への、即ちオ三次BUND建設へのさざやな反、しかし決定的な一歩を踏み出す転換期としてあったのである。我々は、明らかに、昨秋斗争をさう過程のななで、自己オ二次斗争を止揚する契機を、ななものとしたのである。ななる意味において、昨秋斗争は断じて敗北一般ではない。

問題は、我々な、党組織論的には勝利への一歩を踏み出し、にもななめならず、主体としての日本階級斗争としては、敗北したということの内にある。我同盟と中核派を先頭とする日本の左翼独派が帝国主義権力と人民戦線派の法と秩序をスローダウンとし、花初隊を防壁とする強固な対決に対して、組織をなけた斗争をいどみつつも、法と秩序の神聖な守り手-花初隊を軍事的に粉砕し切れなかつたことによつて、我々左翼独派は政治的にも敗北し、市民社会深部に左翼独派のヘゲモニーを打ちたてることなできなかつたばかりな政治潮流としても、決定的な後退を果儀なくされたのである。

ななて、運動は、後退局面に向なつた。吾本藤明の本な再び売れ始め、革マル派のさばり始め、BUNDを始めとする左翼独派は、内部矛盾を深化させていった。単共斗のパンセクトは学園における限界性の打破を、権力との関係を切り捨てて、地域への進出に求め、70年代ナロードニキ運動な始まった。

その一方で、初力は、政治的弾圧の責をエスワートさせ、司法の反動化は、法の前に万人は平等であるというマルジョフ法の立てまをもふみにじつて、思想裁判を横行さつて、治安警察は強化されていった。左翼独派は階級斗争主体のななで、手つまり状況にあら

いていった。こうした状況のなで、我同盟の党内斗争は展開されている。誰が最もよく言い得るのか、どのFracの政治理論が、最も初刀に肉迫し、世界革命戦争を言い得るのか、という、党派斗争における最も原則的なそして冷徹な基準である階級斗争のふるいにかけられることなく、現在の党内斗争、党派斗争は進行している。初刀斗争と、党派斗争とは、すでに一体ではない。党派斗争は、まさしく、それ自身として、独自に、どこか最も緻密な体系をもっているなということとして、同軌に進行している。

我々は、これまで、イデオロギー斗争を、イデオロギー斗争としてだけ進行させることを拒否してきたし、いまでもこの立場に変わりはない。そして、とりわけこの立場は、党内斗争及び、党が軍事を組織することへの党の革命の問題を軸として展開されねばならない局面においては、とりわけ大切であると考えている。党が正規軍を組織するということは、党にとって、一つの危機でもある。つまり、党と軍との分裂を生み出される。党は目法ボケの傾向を不断に生み出し、軍は不断に非目法密教集団化する傾向を持つ。この相違が固定化される時、軍を形成する覚悟は消滅し、党を唄い一つ招選していくのである。またにおいて統一されねばならない局面が生み出されている。党の機能として外化されたところのものが、再び党の質として統一されることを要求しているのである。そして、我々はこの向に対して、党を認証主体=変革主体として答える立場以外に回答の路はないと考える。ほゞなら、党を認証主体に限定し、軍マルのようにその展開をマルレタリアートの階級形成にあく立場からは、軍事を解明することなどは、できようはずもないからである。もし、このような立場に立ったとき、党の軍は、単なる認証性の領域に止まり、我々の説争は、蜂起のときに党の正規軍はどのように形成されるか、というスコラ的な世界へと上昇してしまうのである。

我々の説争を、生き生きとしたものにするためには、我々は再び、認証と変革とを党において統一しなければならぬ。「只産主義とは現実の運動である」と語ったマルクスの言葉を、

我々の言葉として取り返さねばならぬ。党の革命と階級斗争の質的發展—70年代恒常的武装斗争の地平を、党の革命において統一する、そのような党の革命に向けて前進しなければならぬ。しかし、党の革命なるものとして進行していないことは、現実の階級斗争に根拠を持っている。そのことは、すでに述べた。なる意味において、現在の党内斗争の進行は、少くとも、日向派の学習会主義—大衆主義—自治会主義は、階級斗争の現局面の自然発生性の党内斗争への反映である。日向派の口にする軍事が、至て武装蜂起のときまで延期されてしまうことは、そのことの証明である。危機論型戦略の止揚を目指すのではなく、その対極に主体形成を対置する日向派にと、どのように革命的危機を主客双方において形成していくのか、そして、主体にあってはそれを止揚する内実をどう形成していくのか、という、戦略論の核心は忘れ去られ、戦略論は、どの位遠くまでいくのかといった、革命的BUND魂とは無縁の説争に落としてめられていくのである。

既に鉄の戦線「過渡期世界論」において明らかになっているように、我々は、現在のこの70年末を、69年10月斗争におけるマル独派の敗北に引きつづき、階級斗争の小さな後退局面であると考えている。この局面は、なつて日只に武装放棄をもたらしたような革命運動の決定的な後退局面ではない。(始めたときも後退局面だったか) これは、世界革命の外的条件の不在下 における、主体の敗北に根拠をもつ、リセッションである。しかし、このリセッションは至世界において自己を人民戦線派最左派たる中只派から完全に分離し切れない)マル独派の浪迷をもたらしている。それは、日本のマル独派もそう偶したように、軍事と階級形成、そして根拠地の問題である。我々は赤軍派との党派斗争の過程において、根拠地の問題に対しては、一定の回答を与えてきた。しかし、我々はいまだ、軍事と階級形成を、党において、どのように統一するかを(一定程度RG-AJF、党—軍—統一戦線とし

て明らかにしつつも完璧に党組織論として  
提出し切っていない。この問題は、しかし  
もうむしろ実践との関係を抜きに、前進し  
得ない地平にまわっていることは、ほぼ明らかで  
ある。そして、そのことは、理論的向題とし  
てそうであるばかりではなく、軍事の問題を  
はてしなく「論」としてのみ展開することか  
組織そのものの腐敗を防止するという意味に  
あいても、そうなのである。

帝国主義段階において世界革命の主体にあ  
ける条件の形成は、オーストリアに於ける  
ロシア十月革命の成功と、それに引きつづき  
ヨーロッパ革命の波動と、その敗北として存  
在した。帝国主義の運動法則を生み出した帝  
国主義戦争を、その外的条件としていた。(こ  
れを単なる外的条件にとどまらぬことは  
後述する)。

オーストリアに於ける帝国主義の不均等  
発展が、アウタルキー至済へ向った1920年  
代末→1930年代に於けるドイツを頂点とする  
各段階の危機は、オーストリアのスターリニ  
ズムへの変質と、そのことに根拠をもつ革命  
党の不在によって、革命的危機に転化される  
ことなく、労働者階級の敗北に終わった。オ  
ーストリア戦争とそれに引きつづき革命的激  
進期において、コミンフォルムの指針と相対  
的とはいえず独自であった毛沢東の中国共産  
党と紅軍が革命を成功させ、イタリア共産党  
は、人民戦線派らしく、武装蜂起をやればで  
きると判断したにもみみならず(トリアッチ  
)、主体的に放棄した。オーストリア戦争後の  
帝国主義の不均等発展が、平準化へ向かい、  
引きのばされ、緊密化した危機が、「労働者  
国家」、先進帝国主義国家の独派、後進国民  
族解放戦争に対する反革命同盟の必要に制約  
されつつ、IMF-GATT体制との矛盾を  
はらみつつ持続されている現代は、革命の外  
的條件を生み出していくとともに、過渡的主  
体としての「帝国主義の独派を生み出した」  
このことに留意して、物事は、帝国主義の独派を生み出したという状況  
の現象(IMF-GATT)に目を奪われ、「帝国主義の独派を生み出した」  
帝国主義は変わった、もはやレーニン帝国主義  
論では説明できない。現代帝国主義論!」な  
どと騒ぎ立てている諸君は、帝国主義の独派を生み出した  
トの真紅の面にぬられた階級戦争の丁度の中

で、この1970年頃までのような位置にあるのみ、  
我々も後退しているにもみみならず、ほせ、  
治安警察は強化されているのみ、ほせ、三島  
田紀夫が(防衛庁ではなく市ヶ谷で)自決し  
たのみ、などは、説明のしようもないのだ。  
我々の後退はここにおけるそれなのである。  
広い意味において、外的条件が存在する中に  
あける後退なのである。

だが、我々はイデオロギー戦争をイデオロ  
ギー戦争として展開することを許してしまっ  
ている。このことの我々地区委にとっての根本  
的向題として、昨秋ヨ争の発括を主体的に  
展開し切れず、その過程で、そして軍事を組  
織する党人の飛躍の過程で、関西、神奈川、  
(田原)の諸君に政治理論的にも引きずられ  
る傾向があったことを発括してみなければなら  
ない。我々は8回大会に主体的に参加し、論  
争を組織していったにもみみならず、8回大  
会CCC議案として提起された同盟の組織的  
到達点そのものを自らの出発点として主体的  
に再把握し切れず、関西、神奈川の諸君の政治  
的体質の同盟的有効性に対処し切れなかった。  
みみる局面を日向派に突かれることによっ  
て、関西、神奈川とともに、我々もまた党内  
ヨ争に一定の敗北を果儀なくされたのである。  
その政治理論的根拠は、我々が色濃く持っ  
ていた戦略戦術主義「向題は次は何をやる  
のだ」的傾向を、まさしく党が軍事を組織す  
ることを契機として、只産主義の党の主体へ  
と、転倒・止揚することをお要請されているこ  
とを、その部分的表現たる政治過程論の総括  
止揚として一定程度対象化しつつも、真に主  
体的に内実化しきれなかったことにある。

みみる傾向そのものの止揚—オーストリアBUN  
Dの止揚—の過程は、同時に、新しいオーストリア  
BUNDの形成過程でなければならぬ。我  
々は、みみる傾向の止揚の契機そのものを、  
昨年11月ヨ争において、そして、今年のXX  
地区出動において自己の手中にみこめてきた  
と考える。党が軍事を組織することを通して  
、即ちオーストリアBUNDそのものは、自己の止  
揚を、自己を生み出したものか、その発展し  
た真に於いて再び、それを生み出した主体と  
しての党そのものとの一体化を要求している

という意味において、受けとめなければならぬのである。そして、我々にとって、党の革命とはその実現である。

これに対して、オニ次BUNDは4-6において、赤軍派を生み出すことによって崩壊したとする日向派は、まさしく、自己の止揚の契機を、我々を血みどろの党派斗争を展開してきた赤軍派に求めたのである。止揚の契機を他者に求める赤軍派の9回大会-10・11月斗争をヨって来た我々にとって赤軍派は明らかに他者である。我々は赤軍との党派斗争を、まさしく革命記のちがひ-1-7-10-11-12-13-14-15-16-17-18-19-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30-31-32-33-34-35-36-37-38-39-40-41-42-43-44-45-46-47-48-49-50-51-52-53-54-55-56-57-58-59-60-61-62-63-64-65-66-67-68-69-70-71-72-73-74-75-76-77-78-79-80-81-82-83-84-85-86-87-88-89-90-91-92-93-94-95-96-97-98-99-100-101-102-103-104-105-106-107-108-109-110-111-112-113-114-115-116-117-118-119-120-121-122-123-124-125-126-127-128-129-130-131-132-133-134-135-136-137-138-139-140-141-142-143-144-145-146-147-148-149-150-151-152-153-154-155-156-157-158-159-160-161-162-163-164-165-166-167-168-169-170-171-172-173-174-175-176-177-178-179-180-181-182-183-184-185-186-187-188-189-190-191-192-193-194-195-196-197-198-199-200-201-202-203-204-205-206-207-208-209-210-211-212-213-214-215-216-217-218-219-220-221-222-223-224-225-226-227-228-229-230-231-232-233-234-235-236-237-238-239-240-241-242-243-244-245-246-247-248-249-250-251-252-253-254-255-256-257-258-259-260-261-262-263-264-265-266-267-268-269-270-271-272-273-274-275-276-277-278-279-280-281-282-283-284-285-286-287-288-289-290-291-292-293-294-295-296-297-298-299-300-301-302-303-304-305-306-307-308-309-310-311-312-313-314-315-316-317-318-319-320-321-322-323-324-325-326-327-328-329-330-331-332-333-334-335-336-337-338-339-340-341-342-343-344-345-346-347-348-349-350-351-352-353-354-355-356-357-358-359-360-361-362-363-364-365-366-367-368-369-370-371-372-373-374-375-376-377-378-379-380-381-382-383-384-385-386-387-388-389-390-391-392-393-394-395-396-397-398-399-400-401-402-403-404-405-406-407-408-409-410-411-412-413-414-415-416-417-418-419-420-421-422-423-424-425-426-427-428-429-430-431-432-433-434-435-436-437-438-439-440-441-442-443-444-445-446-447-448-449-450-451-452-453-454-455-456-457-458-459-460-461-462-463-464-465-466-467-468-469-470-471-472-473-474-475-476-477-478-479-480-481-482-483-484-485-486-487-488-489-490-491-492-493-494-495-496-497-498-499-500-501-502-503-504-505-506-507-508-509-510-511-512-513-514-515-516-517-518-519-520-521-522-523-524-525-526-527-528-529-530-531-532-533-534-535-536-537-538-539-540-541-542-543-544-545-546-547-548-549-550-551-552-553-554-555-556-557-558-559-560-561-562-563-564-565-566-567-568-569-570-571-572-573-574-575-576-577-578-579-580-581-582-583-584-585-586-587-588-589-590-591-592-593-594-595-596-597-598-599-600-601-602-603-604-605-606-607-608-609-610-611-612-613-614-615-616-617-618-619-620-621-622-623-624-625-626-627-628-629-630-631-632-633-634-635-636-637-638-639-640-641-642-643-644-645-646-647-648-649-650-651-652-653-654-655-656-657-658-659-660-661-662-663-664-665-666-667-668-669-670-671-672-673-674-675-676-677-678-679-680-681-682-683-684-685-686-687-688-689-690-691-692-693-694-695-696-697-698-699-700-701-702-703-704-705-706-707-708-709-710-711-712-713-714-715-716-717-718-719-720-721-722-723-724-725-726-727-728-729-730-731-732-733-734-735-736-737-738-739-740-741-742-743-744-745-746-747-748-749-750-751-752-753-754-755-756-757-758-759-760-761-762-763-764-765-766-767-768-769-770-771-772-773-774-775-776-777-778-779-780-781-782-783-784-785-786-787-788-789-790-791-792-793-794-795-796-797-798-799-800-801-802-803-804-805-806-807-808-809-810-811-812-813-814-815-816-817-818-819-820-821-822-823-824-825-826-827-828-829-830-831-832-833-834-835-836-837-838-839-840-841-842-843-844-845-846-847-848-849-850-851-852-853-854-855-856-857-858-859-860-861-862-863-864-865-866-867-868-869-870-871-872-873-874-875-876-877-878-879-880-881-882-883-884-885-886-887-888-889-890-891-892-893-894-895-896-897-898-899-900-901-902-903-904-905-906-907-908-909-910-911-912-913-914-915-916-917-918-919-920-921-922-923-924-925-926-927-928-929-930-931-932-933-934-935-936-937-938-939-940-941-942-943-944-945-946-947-948-949-950-951-952-953-954-955-956-957-958-959-960-961-962-963-964-965-966-967-968-969-970-971-972-973-974-975-976-977-978-979-980-981-982-983-984-985-986-987-988-989-990-991-992-993-994-995-996-997-998-999-1000-1001-1002-1003-1004-1005-1006-1007-1008-1009-1010-1011-1012-1013-1014-1015-1016-1017-1018-1019-1020-1021-1022-1023-1024-1025-1026-1027-1028-1029-1030-1031-1032-1033-1034-1035-1036-1037-1038-1039-1040-1041-1042-1043-1044-1045-1046-1047-1048-1049-1050-1051-1052-1053-1054-1055-1056-1057-1058-1059-1060-1061-1062-1063-1064-1065-1066-1067-1068-1069-1070-1071-1072-1073-1074-1075-1076-1077-1078-1079-1080-1081-1082-1083-1084-1085-1086-1087-1088-1089-1090-1091-1092-1093-1094-1095-1096-1097-1098-1099-1100-1101-1102-1103-1104-1105-1106-1107-1108-1109-1110-1111-1112-1113-1114-1115-1116-1117-1118-1119-1120-1121-1122-1123-1124-1125-1126-1127-1128-1129-1130-1131-1132-1133-1134-1135-1136-1137-1138-1139-1140-1141-1142-1143-1144-1145-1146-1147-1148-1149-1150-1151-1152-1153-1154-1155-1156-1157-1158-1159-1160-1161-1162-1163-1164-1165-1166-1167-1168-1169-1170-1171-1172-1173-1174-1175-1176-1177-1178-1179-1180-1181-1182-1183-1184-1185-1186-1187-1188-1189-1190-1191-1192-1193-1194-1195-1196-1197-1198-1199-1200-1201-1202-1203-1204-1205-1206-1207-1208-1209-1210-1211-1212-1213-1214-1215-1216-1217-1218-1219-1220-1221-1222-1223-1224-1225-1226-1227-1228-1229-1230-1231-1232-1233-1234-1235-1236-1237-1238-1239-1240-1241-1242-1243-1244-1245-1246-1247-1248-1249-1250-1251-1252-1253-1254-1255-1256-1257-1258-1259-1260-1261-1262-1263-1264-1265-1266-1267-1268-1269-1270-1271-1272-1273-1274-1275-1276-1277-1278-1279-1280-1281-1282-1283-1284-1285-1286-1287-1288-1289-1290-1291-1292-1293-1294-1295-1296-1297-1298-1299-1300-1301-1302-1303-1304-1305-1306-1307-1308-1309-1310-1311-1312-1313-1314-1315-1316-1317-1318-1319-1320-1321-1322-1323-1324-1325-1326-1327-1328-1329-1330-1331-1332-1333-1334-1335-1336-1337-1338-1339-1340-1341-1342-1343-1344-1345-1346-1347-1348-1349-1350-1351-1352-1353-1354-1355-1356-1357-1358-1359-1360-1361-1362-1363-1364-1365-1366-1367-1368-1369-1370-1371-1372-1373-1374-1375-1376-1377-1378-1379-1380-1381-1382-1383-1384-1385-1386-1387-1388-1389-1390-1391-1392-1393-1394-1395-1396-1397-1398-1399-1400-1401-1402-1403-1404-1405-1406-1407-1408-1409-1410-1411-1412-1413-1414-1415-1416-1417-1418-1419-1420-1421-1422-1423-1424-1425-1426-1427-1428-1429-1430-1431-1432-1433-1434-1435-1436-1437-1438-1439-1440-1441-1442-1443-1444-1445-1446-1447-1448-1449-1450-1451-1452-1453-1454-1455-1456-1457-1458-1459-1460-1461-1462-1463-1464-1465-1466-1467-1468-1469-1470-1471-1472-1473-1474-1475-1476-1477-1478-1479-1480-1481-1482-1483-1484-1485-1486-1487-1488-1489-1490-1491-1492-1493-1494-1495-1496-1497-1498-1499-1500-1501-1502-1503-1504-1505-1506-1507-1508-1509-1510-1511-1512-1513-1514-1515-1516-1517-1518-1519-1520-1521-1522-1523-1524-1525-1526-1527-1528-1529-1530-1531-1532-1533-1534-1535-1536-1537-1538-1539-1540-1541-1542-1543-1544-1545-1546-1547-1548-1549-1550-1551-1552-1553-1554-1555-1556-1557-1558-1559-1560-1561-1562-1563-1564-1565-1566-1567-1568-1569-1570-1571-1572-1573-1574-1575-1576-1577-1578-1579-1580-1581-1582-1583-1584-1585-1586-1587-1588-1589-1590-1591-1592-1593-1594-1595-1596-1597-1598-1599-1600-1601-1602-1603-1604-1605-1606-1607-1608-1609-1610-1611-1612-1613-1614-1615-1616-1617-1618-1619-1620-1621-1622-1623-1624-1625-1626-1627-1628-1629-1630-1631-1632-1633-1634-1635-1636-1637-1638-1639-1640-1641-1642-1643-1644-1645-1646-1647-1648-1649-1650-1651-1652-1653-1654-1655-1656-1657-1658-1659-1660-1661-1662-1663-1664-1665-1666-1667-1668-1669-1670-1671-1672-1673-1674-1675-1676-1677-1678-1679-1680-1681-1682-1683-1684-1685-1686-1687-1688-1689-1690-1691-1692-1693-1694-1695-1696-1697-1698-1699-1700-1701-1702-1703-1704-1705-1706-1707-1708-1709-1710-1711-1712-1713-1714-1715-1716-1717-1718-1719-1720-1721-1722-1723-1724-1725-1726-1727-1728-1729-1730-1731-1732-1733-1734-1735-1736-1737-1738-1739-1740-1741-1742-1743-1744-1745-1746-1747-1748-1749-1750-1751-1752-1753-1754-1755-1756-1757-1758-1759-1760-1761-1762-1763-1764-1765-1766-1767-1768-1769-1770-1771-1772-1773-1774-1775-1776-1777-1778-1779-1780-1781-1782-1783-1784-1785-1786-1787-1788-1789-1790-1791-1792-1793-1794-1795-1796-1797-1798-1799-1800-1801-1802-1803-1804-1805-1806-1807-1808-1809-1810-1811-1812-1813-1814-1815-1816-1817-1818-1819-1820-1821-1822-1823-1824-1825-1826-1827-1828-1829-1830-1831-1832-1833-1834-1835-1836-1837-1838-1839-1840-1841-1842-1843-1844-1845-1846-1847-1848-1849-1850-1851-1852-1853-1854-1855-1856-1857-1858-1859-1860-1861-1862-1863-1864-1865-1866-1867-1868-1869-1870-1871-1872-1873-1874-1875-1876-1877-1878-1879-1880-1881-1882-1883-1884-1885-1886-1887-1888-1889-1890-1891-1892-1893-1894-1895-1896-1897-1898-1899-1900-1901-1902-1903-1904-1905-1906-1907-1908-1909-1910-1911-1912-1913-1914-1915-1916-1917-1918-1919-1920-1921-1922-1923-1924-1925-1926-1927-1928-1929-1930-1931-1932-1933-1934-1935-1936-1937-1938-1939-1940-1941-1942-1943-1944-1945-1946-1947-1948-1949-1950-1951-1952-1953-1954-1955-1956-1957-1958-1959-1960-1961-1962-1963-1964-1965-1966-1967-1968-1969-1970-1971-1972-1973-1974-1975-1976-1977-1978-1979-1980-1981-1982-1983-1984-1985-1986-1987-1988-1989-1990-1991-1992-1993-1994-1995-1996-1997-1998-1999-2000-2001-2002-2003-2004-2005-2006-2007-2008-2009-2010-2011-2012-2013-2014-2015-2016-2017-2018-2019-2020-2021-2022-2023-2024-2025-2026-2027-2028-2029-2030-2031-2032-2033-2034-2035-2036-2037-2038-2039-2040-2041-2042-2043-2044-2045-2046-2047-2048-2049-2050-2051-2052-2053-2054-2055-2056-2057-2058-2059-2060-2061-2062-2063-2064-2065-2066-2067-2068-2069-2070-2071-2072-2073-2074-2075-2076-2077-2078-2079-2080-2081-2082-2083-2084-2085-2086-2087-2088-2089-2090-2091-2092-2093-2094-2095-2096-2097-2098-2099-2100-2101-2102-2103-2104-2105-2106-2107-2108-2109-2110-2111-2112-2113-2114-2115-2116-2117-2118-2119-2120-2121-2122-2123-2124-2125-2126-2127-2128-2129-2130-2131-2132-2133-2134-2135-2136-2137-2138-2139-2140-2141-2142-2143-2144-2145-2146-2147-2148-2149-2150-2151-2152-2153-2154-2155-2156-2157-2158-2159-2160-2161-2162-2163-2164-2165-2166-2167-2168-2169-2170-2171-2172-2173-2174-2175-2176-2177-2178-2179-2180-2181-2182-2183-2184-2185-2186-2187-2188-2189-2190-2191-2192-2193-2194-2195-2196-2197-2198-2199-2200-2201-2202-2203-2204-2205-2206-2207-2208-2209-2210-2211-2212-2213-2214-2215-2216-2217-2218-2219-2220-2221-2222-2223-2224-2225-2226-2227-2228-2229-2230-2231-2232-2233-2234-2235-2236-2237-2238-2239-2240-2241-2242-2243-2244-2245-2246-2247-2248-2249-2250-2251-2252-2253-2254-2255-2256-2257-2258-2259-2260-2261-2262-2263-2264-2265-2266-2267-2268-2269-2270-2271-2272-2273-2274-2275-2276-2277-2278-2279-2280-2281-2282-2283-2284-2285-2286-2287-2288-2289-2290-2291-2292-2293-2294-2295-2296-2297-2298-2299-2300-2301-2302-2303-2304-2305-2306-2307-2308-2309-2310-2311-2312-2313-2314-2315-2316-2317-2318-2319-2320-2321-2322-2323-2324-2325-2326-2327-2328-2329-2330-2331-2332-2333-2334-2335-2336-2337-2338-2339-2340-2341-2342-2343-2344-2345-2346-2347-2348-2349-2350-2351-2352-2353-2354-2355-2356-2357-2358-2359-2360-2361-2362-2363-2364-2365-2366-2367-2368-2369-2370-2371-2372-2373-2374-2375-2376-2377-2378-2379-2380-2381-2382-2383-2384-2385-2386-2387-2388-2389-2390-2391-2392-2393-2394-2395-2396-2397-2398-2399-2400-2401-2402-2403-2404-2405-2406-2407-2408-2409-2410-2411-2412-2413-2414-2415-2416-2417-2418-2419-2420-2421-2422-2423-2424-2425-2426-2427-2428-2429-2430-2431-2432-2433-2434-2435-2436-2437-2438-2439-2440-2441-2442-2443-2444-2445-2446-2447-2448-2449-2450-2451-2452-2453-2454-2455-2456-2457-2458-2459-2460-2461-2462-2463-2464-2465-2466-2467-2468-2469-2470-2471-2472-2473-2474-2475-2476-2477-2478-2479-2480-2481-2482-2483-2484-2485-2486-2487-2488-2489-2490-2491-2492-2493-2494-2495-2496-2497-2498-2499-2500-2501-2502-2503-2504-2505-2506-2507-2508-2509-2510-2511-2512-2513-2514-2515-2516-2517-2518-2519-2520-2521-2522-2523-2524-2525-2526-2527-2528-2529-2530-2531-2532-2533-2534-2535-2536-2537-2538-2539-2540-2541-2542-2543-2544-2545-2546-2547-2548-2549-2550-2551-2552-2553-2554-2555-2556-2557-2558-2559-2560-2561-2562-2563-2564-2565-2566-2567-2568-2569-2570-2571-2572-2573-2574-2575-2576-2577-2578-2579-2580-2581-2582-2583-2584-2585-2586-2587-2588-2589-2590-2591-2592-2593-2594-2595-2596-2597-2598-2599-2600-2601-2602-2603-2604-2605-2606-2607-2608-2609-2610-2611-2612-2613-2614-2615-2616-2617-2618-2619-2620-2621-2622-2623-2624-2625-2626-2627-2628-2629-2630-2631-2632-2633-2634-2635-2636-2637-2638-2639-2640-2641-2642-2643-2644-2645-2646-2647-2648-2649-2650-2651-2652-2653-2654-2655-2656-2657-2658-2659-26

という近代主義のいづつく先を學問斗争の過程の中で実践的に示していった。まことに科学とイデオロギーは分化しきれないのである。ひとり、三島由紀夫だけな、右から、我々の地平に迫り得ているのみである。

我々の理論的作業としての覚悟の深化は、この二百年の自らの斗いの到達点を立脚点とすることによってのみ可能である。いひかえるならば、オ三次マンドへの飛躍としての自己止揚を可能にする理論的根拠は、ここにしかないということである。マルクス・エンゲルス・レーニン・トロツキー、そして日本の諸インテリゲンチヤ等々の理論的営為そのものは、我々も、この立脚点に立って再把握していったときのみ、主体的に対象化されるのであって、「場所的立場」に立って現状分析や、戦略論に「本質論」や「特殊段階論の本質論」として「適用」する場合（理戦No9, P25）には、マルクスやレーニンの革命的な理論活動の死せる教条へ転落するのである。  
(そのその)

我々も、いま問題にしなければならぬのは、「思惟の上向過程」（同P26）ではなく、自らな下向していく場合の立脚点そのものなのだ。このことをあいまいにして行為的現在における「場所的立場」による「説理性」と「歴史性」の統一把握といっても（理戦No.9）、そこには、自らの政治党派としての実践を媒介にした到達点とインテリゲンチヤのそれとを区別する向の手立てもないのである。もし区別があるというのなら、日向氏は、自らの使用する「行為的現在における場所的立場」という概念を、黒田寛一のそれとどのように違っているのなを明らかにしなければならぬ。（cf. マルクス主義形成の論理、P23）

我々のこの二百年にわたる斗いの到達点は、過渡期斗争論に媒介された「軍事を組織する質をもった党」である。このことは、我々には、7・6の前段において「権力一党一階級」という視点を提起したとき、すでに萌芽的には意識されていた。しかし、そのことな、決定的に意識されるに到ったのは、昨秋安原決戦を経てからであった。そのことな、党-軍の関係における問題については、す

で述べた。我々は、その党における軍事の質を、これまでの党に対する考え方そのものに対して、発展を要求していることを明らかにしなければならぬ。

覚悟正規軍を組織することは、党そのものを階級斗争世界にみける一つの物質的定在たらしめるのであり、この党の組織し、展開する軍事を、権力一党の攻防を通じて、階級をどのように分解させ、それを党は、国際主義と軍事の質においてどのように隆起に向けて組織化していくのなという問題を突きつけるのである。

我々も、ななる観点を提起し得る理論的基礎は「鉄成No1」過渡期斗争論において、我々も、現代過渡期斗争を、主体的階級斗争世界として指定し、そこにおける党を、帝国主義権力の常時戦争体制との成り違を通じて、世界革命戦争と世界帝国独を切り拓き得るし、切り拓かぬばならぬという視点を確立し得たことにある。そして、この過渡期斗争論の確立そのものな、北トナム革命戦争の生み出した国際階級斗争の新たな情と打倒ソ連スターリニスト圏を物質的基礎とした人民成線派といわれ先進帝国主義内部の人民成線派のこれに対する無対応と北トナム人民の斗いに連帯した北口独派を生み出したこと、そして、我々も自身な発生史的には、日本における反スタ運動の系譜を引きつつも、北トナム反戦斗争から10・8以降の斗いにおいて自己も、ななる潮流の一部としておくことによって、斗争を組織していったこと、このことな、その根拠をもっている。ななる自己の人民成線派と区別された北口独派としての実践のほみにおいて、我々は、国際共産主義運動史上初めて過渡期斗争論を対象化できたのであり、向みしら、本質論や特殊段階論の本質論の適用によって対象化しえたのは、断じてないのである。「適用」によってはしうるのは、せいぜい、「過渡期斗争論」と「現代帝国主義論」という二つのナイスト論を、その相互反省といいた、死せる抽象としなはれ

なくして、我々の出発点は、過渡期斗争における北口独派の一期流としてのBUNDそのものである。



プロレタリアートの階級形成を説くるとすれば、それは決定的に不十分であり、現実の階級斗争(階級の)を説明することはできない。不断に一回主義へ軸落するのである。帝国主義段階における階級斗争は、最終的に戦争の問題へと煮つまって行く。この問題に対するプロレタリアートとその政治指導部の対応は、二つに分解して行く。これまでのように、中向的、至清主義的対応は許されなくなる。この傾向は、南欧とともに帝国主義戦争を賛美する以外に、生き残る道がなくなるのである。資本主義の帝国主義段階への移行を明白にし得なかつたオランダキーはこの道をたどつた。原理論的にしかプロレタリアートの地位を置けきれない者は、藤本主義者であろうと中野の主義者であろうと、政治的には、一回主義者へ転落するのである。これに対して、レーニンは革命的敗北主義の立場を鮮明し、帝国主義戦争を内乱へのスローガンを掲げ、ケンメルシャルド左派を結集させ、世界党としてのオミンターの形成を展望したのである。そして、これまでの革命家の中にあつて、レーニンほど政治斗争の重要性を強調し、プロレタリアートにしか目ま向かない至清主義者を非難した者はなかつた。さらに、我々は、レーニンにおける政治斗争と、マルクスにおける政治斗争のニュアンスの差、レーニンのホリツェウキ党とマルクスの宣言の党との差を承えておかねばならない。マルクスにおける政治斗争は、まだ十分に至清主義的であり、「宣言の党、あるいは国際労働者協会は、十分に労働者党である。それは、マルクスのインターナショナルイズムが、国家がマルショアツの階級の利益を国民の共同利益として表現しようとする事に対して、突ラズに何ものもなしにプロレタリアートの国際的団結を対置し各回資本の対外商業を通じて結合し、そのことによつて世界市場を形成し、恐慌の世界同時性によつて世界同時革命の外的条件を形成して来た産業資本主義段階の資本と、それに糾結されているプロレタリアートの基本的性格の認識にちとアツていたこととに規定されている。この1900年頃において、労働者階級は、さうやくマルショアツから政治的にも自己を区別し始め(1842-1848年頃)、労働

者階級の自己主張は、たとえば至清主義的性格を色濃くも、ていさうと、きわめて政治的の意をこめていたのである。

この段階においては、マルクスによつても、彼は未だ明確に階級から分離してまさしく革命党として捉えることはなほ、たゞ、その根拠そのもの責任はなほ、たゞである。これに対し、帝国主義段階において、彼の措置を抜きに、革命党を語ることはできないのであり、また帝国主義はそれを語りうる下部構造を生み出したのである。

こうして意味において、彼の責任を抜きにして革命の語り得ない以上、日野氏のさうに思いつき的に、革命党の本質としてマルクス革命党を指し示すことは、たとえば「マルクスにおいて対象化された革命Mに関する理論的定義の総体」(理戦9.P.27)といふことは、アイマイの表現を使つたとしても、誤りなのである。また、「特殊段階論の本質として」のレーニン革命党、特殊段階論の本質論の現形形態論的適用としての我々のそれ(世界一回同時革命党) (同P.25)などといつても、何故にさうなのかの証証はなれば、感銘さうと空しさな、先に立つのである。

そして左派の諸君の無体系主義では、世界党の指し示さるべき責任を、一党産出らんに仕得たし考える。

### III. 理戦派党内斗争の理論的根拠としての分野科学主義

オニ次共産主義者同盟戦術派の党内斗争の相互止揚を自らの条件そのものを獲得することなく、分派斗争へと致していることの主要な責任は、理戦派の党内斗争の展開の中心にあるといえる。理戦派は、党内斗争において、自己の理論を、あらゆる絶対化する所から、出発した。そしてこのBUND内における自心口の拡大を「党の革命-オニ次BUND建設として」指し示していた。そしてオニ次BUNDのこのさうな総括にもとずいていたのは、すでに述べた通りである。

このさうな分派-党派斗争を必然化させるさうな党の革命に対する考え方は、やはり、総括の中心のみならず、理論的根拠をこめていたのである。たとえば、「マ



ルクス革命論或いはレーニン革命論が19C中葉の欧州、20C初頭のロシアに於て、<sup>1)</sup> 現実の現実に最大限接近したというこの可能根拠とは、まさにたゞ一つの事実、すなわち彼等の立正化心に理論的諸内容、その当時単なるイデオロギーの領域から科学の領域にまで上向した唯一のものであった、ということに基づいており、従って我々の任務も又、彼らにおけるその諸の定在(マルクス「資本論」、レーニン「綱領主義論」)に匹敵する程に、対象の世界を(1)、合法的に認識し得た内容を獲得することにおける(2)は与らざる(3)こと(理論<sup>4)</sup>と実践との関係)を、マルクスの、あるいはレーニンの革命的実践からその理論を切り離していること(4)の無い(5)は「<sup>1)</sup> 現実の現実に最大限接近した」ということを、認識の科学性に求めたいという、自己の革命党派としての実践的立場から、マルクスレーニン主義を拒絶する(6)という革命党派としての党派性の放棄である。しかも、日向氏がこのように言ったとき、すでに認識と実践との関係は、黒智のいう「行為的現在における場所的立場」というスタティックな関係性をも超えて、争いの科学的な世界へのみこみこまれている。

このことについて、マルクスは次のようにいっている。「対象の真理と人間の思惟に違するものがない問題は、何ら理論の問題ではなく実践の問題である。人間は真理を、すなわち自分の思惟の現実性(7)と力を、その彼岸性を、実践において証明しなければならぬ。思惟を実践から切り離して、思惟の現実的である(8)非現実的である(9)を争うのは、まったくスコラ的(10)の問題である。」(「<sup>1)</sup> フォイエルバッハのテーゼ、第2...」)。「環境の変更と人間の活動あるいは人間の自己変化と一致する(11)ということ、これを革命的実践として見る(12)争いのみ把握する(13)ということ(14)でき、また合理的に理解(15)すること(16)できる。」(同、第3)。このように、マルクスは何よりも、「実践」を強調している。このテーゼに関する論争はさておき、いま日向氏に対する批判としては、このことだけを見ればよい。日向氏の革命理論に対する理解が、マルクスのそれとは全く、理論と実践を切り離し、理論の利用、「適用」として実践をくらえる、すなわちマルクスによって「理論

的態度だけを真に人間的な態度と見なし、これに対して実践はただそのきたむらしい(17)ゴタヤの(18)現象形態においてのみくらえられ(19)固定されている。したがって彼は「革命的」活動の、すなわち「実践的-批判的」活動の意識を理解しない(20) (同、第4)批判(21)した(22)フイエルバッハのレベルを一步も超えていない(23)ことを、理解しておけばよい。

このことは、争いにおいても、同様である。争いにおいて、実践とは、「政治的」の実践であり、理論とは、争いの経済学である。こうして、争いは、自らを「私はマルクス主義者ではない」といひ、実践を政治的争いの手段に用いること(24)によって、理論と実践との関係を定式化し得た(25)の(26)ように考えるのである。そして我々の問題の争いの主義者達は、科学としての争いの経済学を、現実の階級争いに適用しようと、堅い努力を続けているわけである。争いの「経済学はこれと同時に社会主義の主張に根拠を与えること(27)になった。」(経済学方法論)と語った言葉を信じる(28)なら、

しる(29)なら、争いは、この(30)とき、彼の(31)と(32)と(33)と(34)と(35)と(36)と(37)と(38)と(39)と(40)と(41)と(42)と(43)と(44)と(45)と(46)と(47)と(48)と(49)と(50)と(51)と(52)と(53)と(54)と(55)と(56)と(57)と(58)と(59)と(60)と(61)と(62)と(63)と(64)と(65)と(66)と(67)と(68)と(69)と(70)と(71)と(72)と(73)と(74)と(75)と(76)と(77)と(78)と(79)と(80)と(81)と(82)と(83)と(84)と(85)と(86)と(87)と(88)と(89)と(90)と(91)と(92)と(93)と(94)と(95)と(96)と(97)と(98)と(99)と(100)と(101)と(102)と(103)と(104)と(105)と(106)と(107)と(108)と(109)と(110)と(111)と(112)と(113)と(114)と(115)と(116)と(117)と(118)と(119)と(120)と(121)と(122)と(123)と(124)と(125)と(126)と(127)と(128)と(129)と(130)と(131)と(132)と(133)と(134)と(135)と(136)と(137)と(138)と(139)と(140)と(141)と(142)と(143)と(144)と(145)と(146)と(147)と(148)と(149)と(150)と(151)と(152)と(153)と(154)と(155)と(156)と(157)と(158)と(159)と(160)と(161)と(162)と(163)と(164)と(165)と(166)と(167)と(168)と(169)と(170)と(171)と(172)と(173)と(174)と(175)と(176)と(177)と(178)と(179)と(180)と(181)と(182)と(183)と(184)と(185)と(186)と(187)と(188)と(189)と(190)と(191)と(192)と(193)と(194)と(195)と(196)と(197)と(198)と(199)と(200)と(201)と(202)と(203)と(204)と(205)と(206)と(207)と(208)と(209)と(210)と(211)と(212)と(213)と(214)と(215)と(216)と(217)と(218)と(219)と(220)と(221)と(222)と(223)と(224)と(225)と(226)と(227)と(228)と(229)と(230)と(231)と(232)と(233)と(234)と(235)と(236)と(237)と(238)と(239)と(240)と(241)と(242)と(243)と(244)と(245)と(246)と(247)と(248)と(249)と(250)と(251)と(252)と(253)と(254)と(255)と(256)と(257)と(258)と(259)と(260)と(261)と(262)と(263)と(264)と(265)と(266)と(267)と(268)と(269)と(270)と(271)と(272)と(273)と(274)と(275)と(276)と(277)と(278)と(279)と(280)と(281)と(282)と(283)と(284)と(285)と(286)と(287)と(288)と(289)と(290)と(291)と(292)と(293)と(294)と(295)と(296)と(297)と(298)と(299)と(300)と(301)と(302)と(303)と(304)と(305)と(306)と(307)と(308)と(309)と(310)と(311)と(312)と(313)と(314)と(315)と(316)と(317)と(318)と(319)と(320)と(321)と(322)と(323)と(324)と(325)と(326)と(327)と(328)と(329)と(330)と(331)と(332)と(333)と(334)と(335)と(336)と(337)と(338)と(339)と(340)と(341)と(342)と(343)と(344)と(345)と(346)と(347)と(348)と(349)と(350)と(351)と(352)と(353)と(354)と(355)と(356)と(357)と(358)と(359)と(360)と(361)と(362)と(363)と(364)と(365)と(366)と(367)と(368)と(369)と(370)と(371)と(372)と(373)と(374)と(375)と(376)と(377)と(378)と(379)と(380)と(381)と(382)と(383)と(384)と(385)と(386)と(387)と(388)と(389)と(390)と(391)と(392)と(393)と(394)と(395)と(396)と(397)と(398)と(399)と(400)と(401)と(402)と(403)と(404)と(405)と(406)と(407)と(408)と(409)と(410)と(411)と(412)と(413)と(414)と(415)と(416)と(417)と(418)と(419)と(420)と(421)と(422)と(423)と(424)と(425)と(426)と(427)と(428)と(429)と(430)と(431)と(432)と(433)と(434)と(435)と(436)と(437)と(438)と(439)と(440)と(441)と(442)と(443)と(444)と(445)と(446)と(447)と(448)と(449)と(450)と(451)と(452)と(453)と(454)と(455)と(456)と(457)と(458)と(459)と(460)と(461)と(462)と(463)と(464)と(465)と(466)と(467)と(468)と(469)と(470)と(471)と(472)と(473)と(474)と(475)と(476)と(477)と(478)と(479)と(480)と(481)と(482)と(483)と(484)と(485)と(486)と(487)と(488)と(489)と(490)と(491)と(492)と(493)と(494)と(495)と(496)と(497)と(498)と(499)と(500)と(501)と(502)と(503)と(504)と(505)と(506)と(507)と(508)と(509)と(510)と(511)と(512)と(513)と(514)と(515)と(516)と(517)と(518)と(519)と(520)と(521)と(522)と(523)と(524)と(525)と(526)と(527)と(528)と(529)と(530)と(531)と(532)と(533)と(534)と(535)と(536)と(537)と(538)と(539)と(540)と(541)と(542)と(543)と(544)と(545)と(546)と(547)と(548)と(549)と(550)と(551)と(552)と(553)と(554)と(555)と(556)と(557)と(558)と(559)と(560)と(561)と(562)と(563)と(564)と(565)と(566)と(567)と(568)と(569)と(570)と(571)と(572)と(573)と(574)と(575)と(576)と(577)と(578)と(579)と(580)と(581)と(582)と(583)と(584)と(585)と(586)と(587)と(588)と(589)と(590)と(591)と(592)と(593)と(594)と(595)と(596)と(597)と(598)と(599)と(600)と(601)と(602)と(603)と(604)と(605)と(606)と(607)と(608)と(609)と(610)と(611)と(612)と(613)と(614)と(615)と(616)と(617)と(618)と(619)と(620)と(621)と(622)と(623)と(624)と(625)と(626)と(627)と(628)と(629)と(630)と(631)と(632)と(633)と(634)と(635)と(636)と(637)と(638)と(639)と(640)と(641)と(642)と(643)と(644)と(645)と(646)と(647)と(648)と(649)と(650)と(651)と(652)と(653)と(654)と(655)と(656)と(657)と(658)と(659)と(660)と(661)と(662)と(663)と(664)と(665)と(666)と(667)と(668)と(669)と(670)と(671)と(672)と(673)と(674)と(675)と(676)と(677)と(678)と(679)と(680)と(681)と(682)と(683)と(684)と(685)と(686)と(687)と(688)と(689)と(690)と(691)と(692)と(693)と(694)と(695)と(696)と(697)と(698)と(699)と(700)と(701)と(702)と(703)と(704)と(705)と(706)と(707)と(708)と(709)と(710)と(711)と(712)と(713)と(714)と(715)と(716)と(717)と(718)と(719)と(720)と(721)と(722)と(723)と(724)と(725)と(726)と(727)と(728)と(729)と(730)と(731)と(732)と(733)と(734)と(735)と(736)と(737)と(738)と(739)と(740)と(741)と(742)と(743)と(744)と(745)と(746)と(747)と(748)と(749)と(750)と(751)と(752)と(753)と(754)と(755)と(756)と(757)と(758)と(759)と(760)と(761)と(762)と(763)と(764)と(765)と(766)と(767)と(768)と(769)と(770)と(771)と(772)と(773)と(774)と(775)と(776)と(777)と(778)と(779)と(780)と(781)と(782)と(783)と(784)と(785)と(786)と(787)と(788)と(789)と(790)と(791)と(792)と(793)と(794)と(795)と(796)と(797)と(798)と(799)と(800)と(801)と(802)と(803)と(804)と(805)と(806)と(807)と(808)と(809)と(810)と(811)と(812)と(813)と(814)と(815)と(816)と(817)と(818)と(819)と(820)と(821)と(822)と(823)と(824)と(825)と(826)と(827)と(828)と(829)と(830)と(831)と(832)と(833)と(834)と(835)と(836)と(837)と(838)と(839)と(840)と(841)と(842)と(843)と(844)と(845)と(846)と(847)と(848)と(849)と(850)と(851)と(852)と(853)と(854)と(855)と(856)と(857)と(858)と(859)と(860)と(861)と(862)と(863)と(864)と(865)と(866)と(867)と(868)と(869)と(870)と(871)と(872)と(873)と(874)と(875)と(876)と(877)と(878)と(879)と(880)と(881)と(882)と(883)と(884)と(885)と(886)と(887)と(888)と(889)と(890)と(891)と(892)と(893)と(894)と(895)と(896)と(897)と(898)と(899)と(900)と(901)と(902)と(903)と(904)と(905)と(906)と(907)と(908)と(909)と(910)と(911)と(912)と(913)と(914)と(915)と(916)と(917)と(918)と(919)と(920)と(921)と(922)と(923)と(924)と(925)と(926)と(927)と(928)と(929)と(930)と(931)と(932)と(933)と(934)と(935)と(936)と(937)と(938)と(939)と(940)と(941)と(942)と(943)と(944)と(945)と(946)と(947)と(948)と(949)と(950)と(951)と(952)と(953)と(954)と(955)と(956)と(957)と(958)と(959)と(960)と(961)と(962)と(963)と(964)と(965)と(966)と(967)と(968)と(969)と(970)と(971)と(972)と(973)と(974)と(975)と(976)と(977)と(978)と(979)と(980)と(981)と(982)と(983)と(984)と(985)と(986)と(987)と(988)と(989)と(990)と(991)と(992)と(993)と(994)と(995)と(996)と(997)と(998)と(999)と(1000)と(1001)と(1002)と(1003)と(1004)と(1005)と(1006)と(1007)と(1008)と(1009)と(1010)と(1011)と(1012)と(1013)と(1014)と(1015)と(1016)と(1017)と(1018)と(1019)と(1020)と(1021)と(1022)と(1023)と(1024)と(1025)と(1026)と(1027)と(1028)と(1029)と(1030)と(1031)と(1032)と(1033)と(1034)と(1035)と(1036)と(1037)と(1038)と(1039)と(1040)と(1041)と(1042)と(1043)と(1044)と(1045)と(1046)と(1047)と(1048)と(1049)と(1050)と(1051)と(1052)と(1053)と(1054)と(1055)と(1056)と(1057)と(1058)と(1059)と(1060)と(1061)と(1062)と(1063)と(1064)と(1065)と(1066)と(1067)と(1068)と(1069)と(1070)と(1071)と(1072)と(1073)と(1074)と(1075)と(1076)と(1077)と(1078)と(1079)と(1080)と(1081)と(1082)と(1083)と(1084)と(1085)と(1086)と(1087)と(1088)と(1089)と(1090)と(1091)と(1092)と(1093)と(1094)と(1095)と(1096)と(1097)と(1098)と(1099)と(1100)と(1101)と(1102)と(1103)と(1104)と(1105)と(1106)と(1107)と(1108)と(1109)と(1110)と(1111)と(1112)と(1113)と(1114)と(1115)と(1116)と(1117)と(1118)と(1119)と(1120)と(1121)と(1122)と(1123)と(1124)と(1125)と(1126)と(1127)と(1128)と(1129)と(1130)と(1131)と(1132)と(1133)と(1134)と(1135)と(1136)と(1137)と(1138)と(1139)と(1140)と(1141)と(1142)と(1143)と(1144)と(1145)と(1146)と(1147)と(1148)と(1149)と(1150)と(1151)と(1152)と(1153)と(1154)と(1155)と(1156)と(1157)と(1158)と(1159)と(1160)と(1161)と(1162)と(1163)と(1164)と(1165)と(1166)と(1167)と(1168)と(1169)と(1170)と(1171)と(1172)と(1173)と(1174)と(1175)と(1176)と(1177)と(1178)と(1179)と(1180)と(1181)と(1182)と(1183)と(1184)と(1185)と(1186)と(1187)と(1188)と(1189)と(1190)と(1191)と(1192)と(1193)と(1194)と(1195)と(1196)と(1197)と(1198)と(1199)と(1200)と(1201)と(1202)と(1203)と(1204)と(1205)と(1206)と(1207)と(1208)と(1209)と(1210)と(1211)と(1212)と(1213)と(1214)と(1215)と(1216)と(1217)と(1218)と(1219)と(1220)と(1221)と(1222)と(1223)と(1224)と(1225)と(1226)と(1227)と(1228)と(1229)と(1230)と(1231)と(1232)と(1233)と(1234)と(1235)と(1236)と(1237)と(1238)と(1239)と(1240)と(1241)と(1242)と(1243)と(1244)と(1245)と(1246)と(1247)と(1248)と(1249)と(1250)と(1251)と(1252)と(1253)と(1254)と(1255)と(1256)と(1257)と(1258)と(1259)と(1260)と(1261)と(1262)と(1263)と(1264)と(1265)と(1266)と(1267)と(1268)と(1269)と(1270)と(1271)と(1272)と(1273)と(1274)と(1275)と(1276)と(1277)と(1278)と(1279)と(1280)と(1281)と(1282)と(1283)と(1284)と(1285)と(1286)と(1287)と(1288)と(1289)と(1290)と(1291)と(1292)と(1293)と(1294)と(1295)と(1296)と(1297)と(1298)と(1299)と(1300)と(1301)と(1302)と(1303)と(1304)と(1305)と(1306)と(1307)と(1308)と(1309)と(1310)と(1311)と(1312)と(1313)と(1314)と(1315)と(1316)と(1317)と(1318)と(1319)と(1320)と(1321)と(1322)と(1323)と(1324)と(1325)と(1326)と(1327)と(1328)と(1329)と(1330)と(1331)と(1332)と(1333)と(1334)と(1335)と(1336)と(1337)と(1338)と(1339)と(1340)と(1341)と(1342)と(1343)と(1344)と(1345)と(1346)と(1347)と(1348)と(1349)と(1350)と(1351)と(1352)と(1353)と(1354)と(1355)と(1356)と(1357)と(1358)と(1359)と(1360)と(1361)と(1362)と(1363)と(1364)と(1365)と(1366)と(1367)と(1368)と(1369)と(1370)と(1371)と(1372)と(1373)と(1374)と(1375)と(1376)と(1377)と(1378)と(1379)と(1380)と(1381)と(1382)と(1383)と(1384)と(1385)と(1386)と(1387)と(1388)と(1389)と(1390)と(1391)と(1392)と(1393)と(1394)と(1395)と(1396)と(1397)と(1398)と(1399)と(1400)と(1401)と(1402)と(1403)と(1404)と(1405)と(1406)と(1407)と(1408)と(1409)と(1410)と(1411)と(1412)と(1413)と(1414)と(1415)と(1416)と(1417)と(1418)と(1419)と(1420)と(1421)と(1422)と(1423)と(1424)と(1425)と(1426)と(1427)と(1428)と(1429)と(1430)と(1431)と(1432)と(1433)と(1434)と(1435)と(1436)と(1437)と(1438)と(1439)と(1440)と(1441)と(1442)と(1443)と(1444)と(1445)と(1446)と(1447)と(1448)と(1449)と(1450)と(1451)と(1452)と(1453)と(1454)と(1455)と(1456)と(1457)と(1458)と(1459)と(1460)と(1461)と(1462)と(1463)と(1464)と(1465)と(1466)と(1467)と(1468)と(1469)と(1470)と(1471)と(1472)と(1473)と(1474)と(1475)と(1476)と(1477)と(1478)と(1479)と(1480)と(1481)と(1482)と(1483)と(1484)と(1485)と(1486)と(1487)と(1488)と(1489)と(1490)と(1491)と(1492)と(1493)と(1494)と(1495)と(1496)と(1497)と(1498)と(1499)と(1500)と(1501)と(1502)と(1503)と(1504)と(1505)と(1506)と(1507)と(1508)と(1509)と(1510)と(1511)と(1512)と(1513)と(1514)と(1515)と(1516)と(1517)と(1518)と(1519)と(1520)と(1521)と(1522)と(1523)と(1524)と(1525)と(1526)と(1527)と(1528)と(1529)と(1530)と(1531)と(1532)と(1533)と(1534)と(1535)と(1536)と(1537)と(1538)と(1539)と(1540)と(1541)と(1542)と(1543)と(1544)と(1545)と(1546)と(1547)と(1548)と(1549)と(1550)と(1551)と(1552)と(1553)と(1554)と(1555)と(1556)と(1557)と(1558)と(1559)と(1560)と(1561)と(1562)と(1563)と(1564)と(1565)と(1566)と(1567)と(1568)と(1569)と(1570)と(1571)と(1572)と(1573)と(1574)と(1575)と(1576)と(1577)と(1578)と(1579)と(1580)と(1581)と(1582)と(1583)と(1584)と(1585)と(1586)と(1587)と(1588)と(1589)と(1590)と(1591)と(1592)と(1593)と(1594)と(1595)と(1596)と(1597)と(1598)と(1599)と(1600)と(1601)と(1602)と(1603)と(1604)と(1605)と(1606)と(1607)と(1608)と(1609)と(1610)と(1611)と(1612)と(1613)と(1614)と(1615)と(1616)と(1617)と(1618)と(1619)と(1620)と(1621)と(1622)と(1623)と(1624)と(1625)と(1626)と(1627)と(1628)と(1629)と(1630)と(1631)と(1632)と(1633)と(1634)と(1635)と(1636)と(1637)と(1638)と(1639)と(1640)と(1641)と(1642)と(1643)と(1644)と(1645)と(1646)と(1647)と(1648)と(1649)と(1650)と(1651)と(1652)と(1653)と(1654)と(1655)と(1656)と(1657)と(1658)と(1659)と(1660)と(1661)と(1662)と(1663)と(1664)と(1665)と(1666)と(1667)と(1668)と(1669)と(1670)と(1671)と(1672)と(1673)と(1674)と(1675)と(1676)と(1677)と(1678)と(1679)と(1680)と(1681)と(1682)と(1683)と(1684)と(1685)と(1686)と(1687)と(1688)と(1689)と(1690)と(1691)と(1692)と(1693)と(1694)と(1695)と(1696)と(1697)と(1698)と(1699)と(1700)と(1701)と(1702)と(1703)と(1704)と(1705)と(1706)と(1707)と(1708)と(1709)と(1710)と(1711)と(1712)と(1713)と(1714)と(1715)と(1716)と(1717)と(1718)と(1719)と(1720)と(1721)と(1722)と(1723)と(1724)と(1725)と(1726)と(1727)と(1728)と(1729)と(1730)と(1731)と(1732)と(1733)と(1734)と(1735)と(1736)と(1737)と(1738)と(1739)と(1740)と(1741)と(1742)と(1743)と(1744)と(1745)と(1746)と(1747)と(1748)と(1749)と(1750)と(1751)と(1752)と(1753)と(1754)と(1755)と(1756)と(1757)と(1758)と(1759)と(1760)と(1761)と(1762)と(1763)と(1764)と(1765)と(1766)と(1767)と(1768)と(1769)と(1770)と(1771)と(1772)と(1773)と(1774)と(1775)と(1776)と(1777)と(1778)と(1779)と(1780)と(1781)と(1782)と(1783)と(1784)と(1785)と(1786)と(1787)と(1788)と(1789)と(1790)と(1791)と(1792)と(1793)と(1794)と(1795



二二に対して、争いは唯物史観を科擧としての至濟學  
によつて基がつけられる、とすることによつて、スター  
リンをのさかしく返したのである。少くとも、科擧  
としての至濟學及社会主義の主張に相俟を与えた、と  
いうとき、この争いの至濟學は、スターリンにおける史  
的唯物論(科擧としての)と同等の絶対性—トマ性を獲得したので  
ある。争いにおいて、スターリン主義は止揚されてい  
ない。スターリンに対するアンチ・テーゼを提出した  
に止まっている。そして、その科擧主義において両者  
は一致している。二二に、スターリンの党内斗争の展  
開が、除名→粛清へと向つたのと同様に、科擧主義を  
その内裏とする日右派の党内斗争の進め方な「切る」  
ことを自己目的化するこの理論的根拠がある。解党  
主義の根拠がある。

我々がつらなる解党主義者集団・日右派に対して、一  
般的に、仲絶を媒介とした党内斗争を云々することは  
無意味である。彼等にとって、仲絶とは、自己の独自  
利害を、全同盟的利害として表現するための手段にす  
ぎないからである。分派斗争を徹底して推進し抜くこ  
とこそ、彼等を止揚する唯一の道である。我々は、こ  
の道を、さらに前進するのである。

## 追記

戦旗12月号日曜に於いて、破産法で獄中にある同盟  
議長松岡同志あふび、彼を支持する者に対して、「同盟  
内」(?)という表現がつけられた。我々は、

編集長に対して、断固たる自己批判を要求するとし  
ると、こうして革命家としての最低のモラルさえもあ  
らわせない諸君を、その理論的根拠そのものから  
止揚し抜くのである。